家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十六巻　第八号

創業60年
フレーベル館

8

日本幼稚園協会

日本保育学会編

保育学年報

'66 年度版　発売中

第一部　**研究発表**　第17回福岡大会における研究発表を全部掲載・第二部　**保育文献目録** 1966年度の保育雑誌単行本文献・第三部　**保育関係の組織と動き**　保育に関する全般的記録・第四部　**特集「文献による幼児保育 90 年史」**B 5 判　246 頁　　**定価 2.200円**

このような年報は世界にも余り類例を見ないものである。保育に関するその年度のすべてがもれなく集録されているこの保育学年報は発行後年数がたつにつれて、ますますその光を増すことであろう。保育関係者にとって、必要不可欠の文献だからである。

日本保育学会会長　山　下　俊　郎

1965 年版　特集「改訂幼稚園教育要領の実践的批判」——1700 円
1964 年版　特集「保育者の語る保育史」——1800 円
1963 年版　特集「本邦幼児発達規準の研究」——1200 円
1962 年版　特集「日本保育学会の歴史」
「最近の海外保育界の動き」——600 円

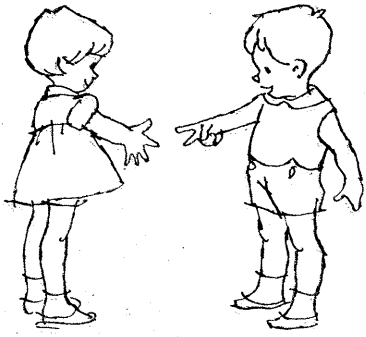
1967 年版予告　日本保育学会大会第20回大会研究発表の集録
特集「保育所保育指針の実践的批判」

好評既刊

幼児の教育　原理と研究　A 5 判　650 円
津守真・木原溥子編　「幼児の教育」誌にのせられた論文実践記事をまとめて読みやすい幼児教育の概論書としたもの

幼児の心理と教育　A 5 判　600 円
藤永　保著
発達心理学の立場から新しく幼児教育を組み立てた新著

フレーベル館



幼児の教育　目次

――第六十六巻　八月号――

表紙　井口文秀

☆幼児期―学習のためのたいせつな時期―

はじめに……（2）

序……（3）

はじめがよければおわりもよい……ローレンス・K・フランク……（4）

幼児期の重要性……キャロリン・A・チャンドラー……（7）

就学前教育における愛情の役割……ダニエル・A・プレスコット……（10）

予防はその何倍もの治療にまさる……キャサリン・ブルンナー……（21）

対立意見についての話し合い……ルビー・フレッチャー……（29）

ナースリースクールにおけるしつけ……キャサリン・H・リード……（34）

ナースリースクールで……サラー・ロー・ハモンド他……（40）

幼稚園で……サラー・ロー・ハモンド他……（44）

読み方の早期教育に関するさまざまな見解……ニラ・バントン・スミス……（47）

幼児の権利は侵されている……ロバート・J・フッシャー……（56）

アメリカインディアンの幼稚園……エルマ・クラーク……（60）

乳児期から成人するまで……ジーン・ウォーカー・マクファーレィン……（64）

Japanese language serial rights arranged through Charles E. Tuttle Co. Inc. Tokyo

はじめに

八月号と九月号は、国際幼年教育協会編「幼児期――学習のために最もたいせつな時期」の翻訳にあてることとした。これは、同協会の機関誌「子供の教育」の最近数年間の論説の中から、選択して一つの小冊子にまとめられたものである。

国際幼年教育協会（The Association for Childhood Education International）の編集になる雑誌「子供の教育」（Childhood Education）は、米国における幼児教育専門誌を代表するものといってよい。最近、この他にも一、二種類、保育誌が見られるが、長い年月にわたって、この雑誌は、米国で唯一の保育専門誌であった。読者の中には、すでにこの雑誌について知っておられる方も多いと思うが、世界的に定評のある雑誌である。その中から最近のすぐれた論説を抜き出して作られたのがこの小冊子であるが、このような試みは、この雑誌としてははじめてである。どうしてこのような企画が、いまなされたのかというと、いくつかの背景になる事情があるようである。

そのひとつは、米国においても日本と同様に、最近、幼児教育は多くの人の関心の的になってきていること。（日本とはやや違った形であるが）第二は、幼児期から、早く教えこもうという傾向が全般に強まっていること。そのために幼児に対する圧力が強くなっていること。第三には、幼児教育界でも、新教育、進歩主義教育に対抗する論があらわれていることなどである。

「子供の教育」誌は、以前から、進歩主義教育の代表と自任している雑誌である。その冒頭には、毎号「固定したやり方を支持するのではなく、考えることに刺激を与えるために」（To Stimulate Thinking Rather than Advocate Fixed Practices）という標語が記してある。そのように、幼児を尊重し、幼児に対する柔軟な態度を説いてきた雑誌が現代に問うた一つの試みと受けとることもできるのではないかと思う。

わが国においても、最近幼児教育が多くの人の関心の的となり、幼児教育施設も普及の度を加えつつある今日、幼児教育の基本的理解をしておくことはきわめて重要である。幼児教育がたんなる早教育ではなく、確実な人間形成につながる道としてとらえなければならない。本誌が二号をあてて、この小冊子の全文の翻訳を試みたことの意義もここにある。

本誌の翻訳出版に際しては、国際幼年教育協会より、快く翻訳を承諾された。ここに記して感謝の意を表したい。

翻訳は約二十名にのぼる幼児教育の専門家の協力によるものである。短期間にこれだけのものにまとめることができたのは、翻訳者の方々の積極的な御助力の賜物である。

津守　真

序

国際幼年教育協会は、一八九二年にその前身である、万国幼稚園連盟が創設されて以来、幼児教育の理論と実際を進めることに積極的に努力してきた。この協会の機関誌である「子供の教育」は、一九二四年に創刊され、幼稚園界の指導者の論説を紹介しはじめた。一九三一年には、ナースリースクールの教育が協会の関心の中にとりいれられ、一九四六年には、二歳という小さい年齢の子どもの要求や福祉にまで注意が向けられるようになった。ほぼ七十五年にわたって幼児のための仕事を継続し、四十年にわたって、六歳以前の子どもの教育と福祉に関係するあらゆる専門分野を代表する指導者の第一級の論説を紹介しつづけた功績は、実に顕著なものがある。

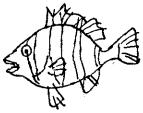
幼児に対する関心が全国的なものとなるのにほぼ一世紀を費やしたということは不幸なことであったが、今や、機運が熟してきている。最近の連邦の法律は、この高まりつつある関心に拍車をかけている。児童発達センターとしてのヘッド・スタート・プログラムの実施は、あらゆる社会階層のすべての子どもに役立つことを示している。幼稚園を公立学校制度の統合的な一部分として見る傾向は一九六五年連邦の初等中等教育令によって促進された。他方託児施設は急速に拡大しつつあるが、それはもはや「子守センター」とは考えられていない。それは児童発達センターと同じ内容をもつものであり、訓練された教師の指導のもとに、注意深く計画された教育プログラムをもっている。長い間必要を感じてきた研究が、幼児の要求について、学習の仕方について、教材について、教育方法について、今や実施されつつある。これらの研究や実験の結果は、幼児教育について先人が教えてくれた多くのことを改めて確認しつつある。われわれの先輩たちの洞察は、何とすぐれたものであろう。最近の科学的研究や実験、またヘッド・スタート・プログラムのような経験から、われわれは多くのことを学んだ。しかし、われわれは子どものために、子ども時代を確保するように注意し、努力を払わねばならない。幼児は、どのひとりも、その子どもの故に価値があるという哲学を、われわれは強調しつづけねばならない。国際幼年教育協会は、子どもの幸福を促進するために、気をゆるめることはできないのである。

幼児に対する教育計画への関心が高まりつつあり、幼児とともに生活し教える使命をおびた数万人の大人の要求もあるので、国際幼年教育協会の事務局は、機関誌「子供の教育」から注意深く論説を選択し、この小冊子を刊行することにした。ここに収載した論説の著者は、いずれも、幼児教育および関連分野の専門家の第一級の人々である。ここに述べられている論説はいずれも時宜に適したものであり、現代の知識や思想傾向の中で考えられたものである。われわれは、ここに集められた論説が、多くの新しい教師にも役に立つことを願っている。図書館でいろいろの雑誌をひっくりかえしてみる代りに、ここに小冊子としてまとめられているので、これは幼児とともに働く多くの人々にとって便利なものであろうと思う。しかし何よりも、この小冊子を通して、全世界の幼児が利益を得ることを私どもは願っている。

デル・C・クヂェル国際幼年教育協会会長（一九六五〜一九六七）

はじめがよければ、おわりもよい

ローレンス・K・フランク



ローレンス・K・フランクは、大学教授であり、相談者であり、著述家である。ニューヨーク、キャロリン・ザックリー・研究所の前所長である。

成長、発達、学習、および人間のパーソナリティーの形成は、ひとつの段階から次の段階へと積み重なってできていく過程である。だから、発達と学習が、健全に行なわれるのに必要な初期の経験が得られないと、それから後の発達もそこなわれるかもしれないのである。

哺乳動物の若い生活体としての乳児は、そのはじめから養護し養育することによって、われわれの文化社会に参加して生活することができるようなパーソナリティーにつくられていくのである。そのことに気がつくとき、人間の子どもがよい出発をすることがきわめて重要であることがわかる。そのようにつくられていくためには、子どもは周囲の世界に信頼することが必要である。換言すれば、エリクソンがいうように、人間に対する基本的信頼が必要である。また、子どもが成長して、家庭の外の世界に出たときに当面するいくつもの人生の課題に、正面からとりくんでいく勇気を必要とする。

もしも、子どもが身体の機能や、生来の衝動的行動において未成熟であったり、極度に障害を受けていたりするならば、また、もしも、栄養や養護が不十分であるならば、あるいは、もしも、

子どもが愛情や慰めを拒否され、自分自身に対する尊敬や、弱い存在としての自尊心が犯されるならば、その子どもは発達の初期の段階に「やり残した仕事」を負ったまま、人生を進まねばならないであろう。そして、いつまでも、憤慨や罪悪感の慢性的な感情になやみ、それが後の学習をそこなうことになろう。

こうして、子どもは学校に入学する以前に、人生に対する基本的な態度を発達させ、われわれの社会や文化の中で生きるのに基本的な知識を学ぶのである。それは常に、家庭の中で子どもに伝えられ、また、子どもは自分なりにその経験を理解し、消化していく「精神的ビタミン剤」すなわち、心からの愛より出ずる愛情、辛棒強く子どもを理解しようとする態度、それからとくに子どもの独自な個性を尊重して認めることを子どもは必要としているのであって、家庭でこのようなものが得られる子どもは幸いである。子どもには、できないことを期待してはならないし、また、健全な人格となるためにひとりひとりが必要としているものを奪ってはならないのである。

明日のための最善の備えは、今日を充実して生きることであるということを、私どもは十分な実例をもって示すことができると思う。赤ん坊は赤ん坊として充実して生き、幼いなりに思うように活動するうちに、赤ん坊の幼稚な活動からぬけ出す備えができてくる。こうして子どもはよちよち歩きの時代を迎える。よちよち歩きの子どもは、その段階を充実して生きることによって、発達の次の段階に進むことができ、またそうしたいと積極的に望むようになる。よちよち歩きの時代を十分に生きることが、幼児となるための最善の準備である。こうして子どもは、就学前幼児としての新しい課題や機会に直面する備えができていく。

就学のための最善の準備は、就学前の幼児として生活し学ぶのに必要な環境を十分に備えることであり、その時代に適切な経験を、広くまた深く、与えることである。ナースリースクールや幼稚園の時代から、いわゆる勉強を始めたいという現代の親の圧力は、子どもから子ども時代を奪いとろうとするものである。後の学業生活に能率よく適応しようとするならば、直接経験と自発的活動による学習の機会が重要なのであるが、親の圧力は幼児からその機会を奪いつつある。

子どもが学校に入学したときに示す不適応の多くは、幼児期の経験にもとづくものである。――幼児期の子どもが、幼児として生きる機会を奪い、おとなが強制した生活を与えることは、たんに幼児期のみでなく、生涯にわたって、失望感、臆病、抵抗感、またときにはおとなに対する根深い敵意の感情を培っている。このような感情は、学校にいくようになって、教師に対し、またあらゆる学業場面で示される。

私どもは、ここで、多年にわたってジョン・デューイやアーサ

ー・F・ベントリーが提唱したことを記すことによって、両親の幼児教育や学校教育に関する考え方や期待を、変革していただくようにおねがいしたいと思う。

その著書「知ることと知られたこと」という書物の中で、知識とは何か獲得して分け与えることができるような、神秘的な「もの」であるという古代の考え方は、もはやすてなければならないことを、彼らは主張している。そのような観念的な考えは、もっと力動的な考え方にかわらなければならない。すなわち、「知るということ」は、知ることの主体者が、すでに知られたこと、あるいは将来知られることとの間に樹立する力動的な行為的関係である。

こうして、子どもは出生の時から、周囲の世界や人を知りはじめる。感覚器官、とくに口や手や足で、触覚を通して次第に「知る」ことを学ぶ。それから次には、言語やはなしことばを通して、次には概念や観念を通して学ぶようになる。それぞれの段階の「知ること」は次の段階の「知ること」の基礎となっている。そして最初は空間—時間的な物の世界、すなわち、いろいろのものや動物、場所、それから人に直面して、自分自身と外の世界との関係をつけていく。それから次に、実際経験を通して、記号、とくに文字が意味をもつようになり、それによって言語や概念も意味をもち、子どもは、そのような記号の世界に自分自身を関係づけていく。

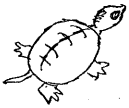
子どもが一年生に入学すると、認識面や概念的思考の上で子どもはいろいろの誤りをして、それを直すのに苦しむ。そこで幼稚園やナースリースクールは、「認識セラピー」とでもいうような役割を果たすことができる。すなわち、子どもの誤った概念や、間違った先入観、歪んだ観念などをすてて、もっとたしかな、正しい概念におきかえ、周囲の世界と「知る」関係にはいることを助けることができる。ちょうど、子どもが空想や感情のはけ口を遊びの中に見出すように、子どもは遊びの中で概念を表出し、それが固まってしまってかえることが困難になる前に改めることを助けることができるのである。

多くの子どもたちは、不幸にも、家庭でよい出発をしていない。ナースリースクールや幼稚園や小学校では、教師が子どもたちの必要に敏感であるならば、自信と勇気を新たに与えることによって、出発点のしくじりを克服することを助けることができる。そこでは、子どもの心がまだ柔軟なうちに改めなければ、次第にハンディキャップとなるような初期の行動様式をかえていくことを助けることができるのである。

（お茶の水女子大学・津守　真訳）

幼児期の重要性

キャロリン・A・チャンドラー



キャロリン・A・チャンドラー博士は、メリーランド州、ベセスダにあるU・S・保健、教育、福祉機構の、米国精神衛生研究所、地域社会事業部、地域社会精神衛生相談員である。

この人工衛星が打ち上げられるような宇宙時代には、精神衛生や教育にたずさわる私どもは明らかに、現代の危機に直面している。超ロケット弾からスーパーマンに至るすべてのものをできる限りの早さで生産しなければならないという圧力が非常に大きい時代である。こういう時にあって、何か技術的なくふうをすれば成長や発達の過程までもスピードアップすることができるという考えは非常に危険であり、またその説が幼児期の子どもに適用されるならば、ますます危険である。

幼児期はそれにつづく児童期から老年に至るまでの長い期間にわたって影響を与えるので非常に重要な時期である。幼年期の初期に成熟と学習という二つの過程を経て人間は成長していく。学習はその子どものまわりにある物や人によって促進されるが、成熟への発達段階は短縮されたり、とばされたりすることはできない。個々の子どもによって発達の速度には違いはあるが、子どもは皆同じ型の発達過程を通るのである。これは知能ばかりでなく、身体的、情緒的発達、あるいは人格の発達についても同じことがいえるのである。

成熟と学習

赤ん坊は立つ前にすわり、歩く前にはい、話す前に歩くことができるようになる。「手におえない二歳児」はやがて「信頼できる三歳児」になり、それがまた「いらいらすることの多い四歳児」として育ち、やがて「かわいい魅力的な五歳児」へと成長するのである。このような発達の過程において、それぞれの段階はその前の段階の上に築かれるのである。子どものその後の発達に対す

るレディネスは、その前の段階に成功したかどうかに大きくかかっている。もしこの事実を無視するならば、両親や教師の側には不安やつまずきをひき起こし、子どもの側には失敗感を抱かせることになる。

子どもは成熟と学習によって成長する。子どものよろこびは子どもとなることである。子どもが子どもになるためには、その子どもに成長するための時間が必要である。おとながそれに気がつかず早く期待をかけすぎると失敗する。子どもをそれぞれ個人のペースに従って育てようと思っている理解のある寛容な両親や教師でさえも、子どもが夢や空想にふける時間を与えることを忘れている。おとなは子どもが次の段階に前進することができるときに、それをひきとめたり、時期がきていないのに、無理に次の段階に押し出そうとしたりすべきではないことをよく知っている。けれどもこのように理解のあるおとなでさえも、子どもを成長させようということだけを一生懸命考えて、子どもの楽しみを保護してやることを見落としてしまうのである。

雑誌や書物、パンフレットなどに、幼児期の子どもに必要なことについて、すでに多くのことが書かれているので、それをくりかえして述べるのは陳腐なことになるかもしれない。しかし、若い科学者、若い技術者、若い立法官、若い行政官を早期に育成しようという圧力が高まっている今日、すでにいいふるされた真理についてあえて新たに述べることも意味があるであろう。

愛情、受容、承認、適応能力

すべての子どもは愛情と受容、承認を欲している。赤ん坊は愛されることによってのみ生存し、また成長するのである。私どもは母親の愛情に欠けた赤ん坊は、身体的にも知能的にも情緒的にも発達がおくれ、また発育不能となり、死さえも招くことがあることを研究によって知っている。またその反対に、あたたかい母親の愛情のなかで育つ子どもは標準よりずっと上回った早さで成長することも研究を通して知らされている。

その子どもが独自的なひとりの人間として受けいれられるということは、その子どもの健全な発達に絶対に必要なことである。その子どもの髪が金髪であれ、褐色であれ、また背が高くても低くても、やせていてもふとっていても、そのままに受けいれられることが必要なのである。それによってその子どもは、自分はまわりのおとなにとってたいせつなひとりの人間だということを自覚して成長するのである。子どもが成長したときに自分自身をどうみるかということは、成長期におとなから重要さを認められたかどうかということによるところが大きい。いいかえれば、おとなとして私どもがもっている自信と自尊心は、子ども時代にわれわれが尊敬されて扱われることによって作られたものなのである。

承認ということはいろいろの意味に解することができる。ある親は承認するということは完全に子どもに表現の自由を与えることだといい、ある人は承認に価することだけにとどめるべきだと

考える。またある人は、何を認めるか認めないかも判断できず、あいまいな矛盾の中にいる。承認ということはこのいずれでもない。承認とは受容よりも一歩先のことである。受けいれることは子どもをそのままに、その子どもであるという状態で受けいれることである。それに対して承認するということは、その子どもが何かをする過程を認めるのである。

もし子どもが、幼児期に、愛情の中で育ち、受容され、承認されて成長するならば、その子どもは第四の段階に達することができる。すなわち、最も大切な発達段階である適応する能力を得ることができるのである。

適応することは生きることであり成長することである

現代の動きの早い核時代において、人間と環境との戦いは、私ども人間の生命の歴史と同じように古くからあったことを思い起こしてみるとよい。この長年にわたる戦いに、人類はすでに勝ったともいえないし負けたともいえない。むしろ人間とその環境の間に平衡状態がつくられたといえよう。この平衡状態は人間が環境に適応することによって生まれたのである。それがなくしては私どもは生存することはできなかったであろう。このような現在のジレンマにあって、私どもが現在の急速に変化する環境と平衡を保っていくためには、適応の過程にたよるほかはないのである。適応できないということは死滅することである。適応するということは生きることであり成長することである。

☆もし子どもが最初に愛され、また承認されながら育ったならば、彼は精神的にもよく成長し他の人々に愛と承認を与えることができるようになる。もし私どもが承認するということが子どもに制限を与えないことであると考えるならばそれは危険なことである。子どもを愛するということは彼のしたいことを何でもゆるすということではない。制限しないことは危険であり、制限しないことが愛ではない。しかし制限するということは良い悪いという判断を下すことではない。私どもは三歳児が他の子どもを傷つけたとしても悪い子だといわないし、そうしないからよい子だとはいわない。私どもがいかにその子どもを愛し関心をもっているかということや、また彼をひとりの人格として考えるゆえに、あるときには「ノー」といわなければならないのだということを、彼に感じさせるように導くのである。語られる言葉でなく、おとなと子どもとの関係が大切なのである。なぜなら子どもはおとなに守られて安全であることを感じ、またおとなを信頼することを学ぶことが大切だからである。私どもは四歳の子どもに「彼が利己主義である」とか「よくわけあうか」とか、あるいは「親切で友好的である」などという必要はない。もし子どもが、おとながいつも自分とわけあっていることを感じ、また彼自身の経験がそういう方面で満足していたならば、彼もまた他の人と同じように建設的な関係をもちたいと思うであろう。そして快く人に与えまたわけあうであろう。それは彼にとって楽しいからである。他の子どもが喜んでくれるものを何ももっていないと思っている子どもは、健全な精神をもたない失われた小さな魂である。――スー・テリー・ウッドソン　（北陸学院短期大学・南　信子訳）

就学前教育における愛情の役割

ダニエル・A・プレスコット

この論文は一九五六年にアテネで開かれた幼児教育世界会議において、メリーランド大学児童研究所名誉所長ダニエル・A・プレスコット氏が述べた講演である。その演題は今回の研究テーマと直接関連があるので、許可を得て本誌に掲載した。一九六一年以来、幼児教育世界会議（OMEP）では、就学前（pre-school）の子どもという名称のかわりに、初等教育前（pre-primary）の子どもという名称を用いはじめている。

科学者たちは、人間の病気や不幸を研究しているうちに、重要な問題をしばしば発見することがある。すなわち、ある事柄が悪化すると、その原因が追求される。その結果、否定的な面が明らかになると、逆に、なにが必要かという積極的な面が、ある程度理解されるようになる。愛情の問題についても同様なことがいえる。

幼児の健康や発達の問題を取り扱う研究者は、過去三〇年間にわたって、幼児期の情緒的不適応や、性格的欠陥をもたらす発育障害の原因を明らかにするために、身体的、経済的、心理的要因を熱心に追究してきた。そしてこれらの不幸なできごとが、なにかの要因の不足によるものであることを、しばしば発見してきた。そして最近では、愛情の不適切な表現が、発達障害の重要な原因のひとつであると考えるようになっている。

愛情とはどのようなものであり、また、愛情は人間の成長発達において、どのような積極的役割を果たしているのであろう。これらのことを詳しく知るために、次にいくつかの研究を引用したいと思う。不適応を改善し、人間の可能性を十分に発揮させる力の性質を明確にとらえることができなければ、愛情の欠乏によって生じる不適応や発達の障害について述べても役にたたないであろう。

研究資材について

アメリカ合衆国では、過去三〇年にわたって、赤ん坊の出産は、家庭よりも病院で行なわれるのが習慣になっている。このために母親と赤ん坊は、かつてよりも、いっそう行き届いた医療的保護が受けられるようになった。そして産婦と乳児の死亡率も、いちじるしく減少した。しかし、出産が産院で行なわれるようになってから、母親と赤ん坊が同じベッドでねることや、同じ部屋で時を過ごすことが許されなくなり、赤ん坊は母親から引き離されて、数日間は育児室で他の赤ん坊と一緒に育てられるようになった。ある間隔をおいて赤ん坊は母親の部屋に運ばれて授乳されるが、すぐに育児室に戻される。そして特別の訓練を受けた看護婦によって欲求がみたされる。

このような状態で育てられると、多くの子どもたちは栄養障害をおこし、時には〝マラスマス〟（消耗しつくすという意味）と呼ばれる症状を示すことがある。この症状は一九四二年にバクウィンによって報告された。その後、ニューヨークのマーガレット・リブル博士は、この現象に関する数冊の著書と論文を出版した。それ以前に、精神医であるディビッド・レビィ博士は、一九三七年の American Journal of Psychiatry に「基本的愛情飢餓」という論文を発表している。彼はこの論文で、乳児や幼児は食物と保健衛生的な保護だけで十分に成長するものではなく、心身の健全な発達のためには、どうしても愛情と愛撫と、そして母体との接触が必要であると主張した。また、ベバン・ブラウンは母乳を与えることが子どもの心身の健全な発達のために、いかに大切であるかを強調している。このようなことから、愛情の欠乏と、自然な愛情にもとづかない授乳法は、乳児の栄養障害の一因であると思われる。

子どもの発達における愛情の重要性を示す別の種類の研究資料がある。戦争と戦後の混乱は、数百万の子どもの家庭生活を破壊し、そして数千の孤児をつくりだした。両親をなくしたこれらの子どもたちを保護するために、多くの国では施設を増設したが、これらの施設の養育条件は、家庭における子どもの養育条件に比べて、非常に劣っていたので、施設児の身体的、精神的、情緒的発達に対して、多くの科学者たちの関心が向けられるようになった。

ドロシー・バーリンガムとアナ・フロイドの共著「家族のない子どもたち」、ウィリアム・ゴールドファーブが American Journal of Orthopsychiatry に発表した一連の論文、ジョン・ボウルビィが一九五一年に世界保健機構（WHO）のモノグラフとして出版した著書、ひきつづき一九五三年に Journal of Mental Science に発表した同博士の論文、ビャーズ、オバーズ、レーネ、スピッツらによる一連の有益な学術論文などは、両親からの愛情が得られない幼児は、元気を喪失し、身体的にも知的にも充分な成長が困難であることを明らかにしている。また施設で育てられると、

子どもたちは不健全な情緒的反応を示すと報告されている。しかし幸いなことに、ある特定の成人と、親密で継続的な接触が得られるような施設で保護された子どもには、このように有害な障害が認められなかったといわれている。いずれにしても、子どもが立派に成長するためには、単に栄養と身体的な保護と組織的な指導だけでは不十分であって、それ以外のなにかが与えられねばならないことを多くの研究資料は示しているのである。〝愛情〟と呼ばれる一対一の人間関係と、この愛情的結びつきにもとづいた日ごとの相互関係が、健全な発達に必要な情緒的必要条件をみたすものである。

就学前期の子どもの発達における愛情の役割を証明する第三の研究資料は、文化の異なった家庭環境や養育条件を研究する文化人類学者から得られている。

ウエイン・デニスの「ホピ族の子ども」、マーガレット・ミードの「南太平洋の島国から」、アッシュレイ・モンターグの「人間発達の方向」は、この分野の代表的な文献であるが、いずれも、異なった文化的環境における養育法と、それらが性格形成に及ぼす心理的影響について詳しい資料を提供している。アッシュレイ・モンターグは、文化人類学者たちによって報告された資料を次のように要約している。

「多くの民族についての観察と研究によって、釣合のとれた協力的な成人の性格は、おもに欲求不満の経験によって形成されるものであることを、われわれは見いだしている。また、これとは逆に、釣合のとれない非協力的な成人の性格も、幼児期において最大限の欲求不満と、最小限の欲求満足を経験した結果であるといえる。」注1

さらにモンターグは、愛情によって幼児の満足は最大限に達し、愛情の欠乏によって幼児の欲求不満は最大限に達することも明らかにしている。

科学的研究にもとづいたこれら三種類の研究資料は、乳児や幼児の十分な成長と、健全な性格の発達にとって、愛情が絶対に必要なものであることを示している。

愛情とはどのようなものか

健全な成長のために乳幼児が経験しなければならない人間関係を、私は〝愛情〟と名づけている。〝愛情〟という用語が、果たして適当であるかどうかについては科学的な検討が必要であるし、また、その本質の定義についても慎重でなければならない。そこで次のような問題について考えてみよう。

(1)愛情には実体があるのだろうか。それとも愛情とは、われわれの文化がつくりだした、単なる空想の所産にすぎないのであろうか。

(2)もしも愛情には実体があるとすれば、その本質はどのようなものであろうか。

(3)愛情には実体があるとすれば、人間の発達において愛情はどのような役割を果たしているのであろうか。

私は発達心理学、教育心理学、文化人類学、社会学、精神医学の文献や伝記などを読んだが、発達心理学や教育心理学の文献には〝愛情〟という言葉がほとんど使われていなかった。たとえその言葉が用いられている場合でも、その用語について定義を述べている文献はなかった。もしも愛情には実体があるとすれば、人間の生活に及ぼすその影響を慎重に検討し、どのような条件が愛情の影響力を強めるかを研究しなければならない。これとは逆に、もしも愛情には実体がないとすれば、一体なぜ語り草の中で愛情がそれほど強く表現され、それほど無残に人の希望をくじき、それほど人の気持ちをまどわせるのであろうか。いずれにしても愛の本質に関する科学的な研究資料は、あまりにも少ないのが現状である。

まず最初に、数冊の著書の中で述べられている愛情についての考えを紹介しよう。ブレッケンリッジとビンセント、ストラングとバーカー、およびコウニンとライトは、それぞれ愛情には実体があると考えている。彼らによると、愛情は行動、発達、および適応に対して強い影響力をもっている。愛情の積極的な面については、彼らはばく然としたことしか述べていないが、愛情の欠乏や愛情表現の不適切さなどの否定的な面での影響については、いろいろな事実を指摘している。また、クルックホーンやマレーも、性行動や家族関係について多くの研究を報告しているが、私が今ここで取り上げているような愛情の問題についてはふれていない。

ジェーム・プラントは、愛情を実存的なものとみなしているが、愛情についての定義はしていない。彼の見解によると、愛情は子どもの基本的な安定感と所属感を形成するための役割を果たしている。不安定で、愛されていない子どもは、不安と混乱の状態におちいり、その反動として攻撃的な行動を示す。彼らが親や社会から教育やしつけを受けたり、また独立を求めたりする時に、彼らの不安定な心理的混乱が、はっきりと表現されることがある。

ハリー・スタック・サリバンは愛情を次のように定義している。

「他人の満足や安定が、自分自身の安定と同様に重要なものと感じられる時、愛情が生まれたといえる」注2

人の心に愛情が生じると「人々の中に共通に存在する人間性を理解できるようになる」とサリバンは述べている。

次にオーバーストリートの言葉を引用しよう。

「愛情とは、相手の人間を所有することではなくて、相手を承認することである。すなわち、相手の人間性を最大限に認めることである。法律や依存的関係や所有感によって関係を結ぶことは、決して相手を愛しているのではなく、相手を従属させようとして

いるのである。われわれが純粋の愛情を経験すると、善意にもとづいた包容力をもつようになる」注3

一般に用いられている〝愛情〟という言葉は、あまりにもばく然としているため、フロムは〝創造的愛〟という新語をつくりだした。フロムによると、子どもに対する母親の愛も、人間に対するわれわれの一般的な愛も、異性間のエロティックな愛も、本質的には同じだと考えられている。いろいろな形の創造的愛には、基本的なある種の要素、すなわち、保護、責任、尊敬、理解が共通に認められる。彼は次のように述べている。

「保護と責任の観念は、愛が活動的なものであって、単なる熱情ではないことを示している。働きかけて、なにかを生みだすことが愛の本質である・・・愛する者に対する尊敬と理解とをともなわない愛は、支配と所有の欲望に変わるであろう。尊敬と比類のなさ・・・愛とは二人の人間が誠実さを保ちながら、互いに親密の情を示しあうことである・・・相手の心の底にふれ、相手を最高のものと思うことが愛することである」注4

フロムはまた、他者に対する愛と、おのれに対する愛とは、別個のものではないといっている。

「自己の生活、幸福、成長、および自由を求める主張は、他者を愛する能力によって決定される・・・他者を創造的に愛し得るものは自分自身をも愛する・・・利己主義者は自分を大いに愛しているのではなくて、むしろ、あまりにも自分を愛していないのである。実際には彼は自分自身を憎んでいるといってもよいであろう。当然の結果としてこのような人間は不幸であって、生活からなにかの満足を得ようとしてむだな努力を続けるであろう・・・」注5

自己に対する愛（自尊の念）、他者に対する愛、および人類に対する愛に関連した文献をまとめるにあたって、私の心を強くとらえたのは、人類に大きな貢献をした三名の偉人の生涯と、その著書である。その三名とは、賀川、ガンジー、シュバイツァーであるが、次に彼らの見解を紹介しよう。

賀川は次のように述べている。

「愛はすべてのものを目ざめさせる・・・創造とは愛を追求するわざである・・・愛こそ神の本質である・・・社会生活において人々は出会い、そして物質的な手段によって愛しあう・・・愛は美しく飾られている・・・愛によって経済生活は精神的な内容をもつようになる・・・真実の社会の構成は、愛にもとづいた教育によってのみ達成される・・・愛は活動的なものである・・・なにも存在しないところに、なにかをつくりだす力をもっている。もしもわれわれが経済学をこのような角度から考察するとすれば、経済学の研究は愛の科学となるであろう・・・芸術は外見的な美を創造しなければならないが、芸術そのものの中に愛がなければならない」注6

愛の社会的、政治的実践は、現代のインドに、いろいろな奇蹟

をもたらしている。次にガンジーの言葉を引用しよう。

「真に非暴力的であるためには、私は自分の敵を愛し、たとえ相手が私を打っても、私は彼のために祈らなければならない・・・われわれは法令や制度を攻撃することはできるが、人間を攻撃してはならない。われわれ自身が不完全であるから、われわれは他人に対しても寛容でなければならない・・・許すことは罰を与えることよりも、はるかに立派な行為である」注7

ガンジーは地主に次のようなことを述べたことがある。

「地主は単なる地代の集金人であることをやめるべきである。彼らは借地人の保護者となり、信頼される友とならねばならない。地主はまた農民に、ある程度の保有権を与え、農民の福祉を考え、農民の子どもたちのために良い学校を建て、成人には夜学を設け、病人には病院と治療所をつくって保健衛生の向上をはかり、その他いろいろな方法によって、地主は農民の友であることを示さなければならない」注8

神は愛であり、神の存在は行動によってのみ証明できることをガンジーは強調したのである。

「信仰は言葉によってではなく、生活を通して示されなければならない。信仰が生活の中で躍動しておれば、それは自然に他の人に伝わるであろう」注9

過去五〇年間にわたって、世界に不滅の業績を残したもう一人の人物は、アルバート・シュバイツァーである。彼は生命に対して深い尊敬の念をもっていた。そして愛こそ宇宙における最大の力であると信じていた。彼は次のように述べている。

「時代の精神とでもいうのか、今日の人間は外から与えられるものを受け入れようとするために、自分自身の考えに対して懐疑的なところがある・・・しかし、外から与えられる真実を受け入れるためには、自分自身の思考によって真実に到達できるという自信がなければならない・・・人間は世界と精神的につながりをもち、そして一体とならなければならない。生命と世界について考えるとき、われわれは生命に対する尊敬を必ずもつであろう・・・愛こそは無限（神）から、われわれにさしこむ霊の光である。究極的なもの、すなわち神において、創造の意志と愛の意志はひとつになっている・・・愛を通して神の実在を霊感することによって、人間は必要なものを所有することになる」注10

これらの三人はすべて行動の人であった。そして彼らは、ほとんど不可能と思われたことを、今世紀の前半においてなしとげたのであった。これらの人たちは愛（他人への愛、全人類への愛、神への愛）こそが彼らの働きの原動力であったことを一致して認めている。明らかに彼らの愛は〝創造的な愛〟であった。われわれは今や最初に提出した質問に対して、はっきりとした態度で答えることができる。愛は存在している。疑いもなく愛には実体がある。愛の実存は三人の偉人の行動と、多くの科学者の研究によって、はっきりと証明されているのである。

愛の本質について

さて、愛の本質とはどのようなものであろうか。私は今までに愛についていくつかの論文を書いている。今ここで述べてきた事柄との関連において、私はそれらの論文の要点を述べてみようと思う。

1、　愛は愛されるものと常に関連をもっている。愛する者は愛される者の気持ちを察し、その気持ちを分かちあい、そしてその結末に関心を抱く。このことをもう少し詳しく知るために、サリバンの言葉を引用しよう。

「もしある人のことが、自分自身のことと同じように重大になるとすれば、他の人に対する場合とは全く異なった気持ちで、その人に語りかけることができる。そこに自由がある・・・微妙な意味が理解できるし、拒絶されることを恐れずに、あらゆる種類の事柄について議論し、合意に達することができる。」注11

2、　愛する者は愛される者の幸福と向上に深い関心をもっている。この関心は非常に強いので、愛する者の人格における〝自我構造〟の一部として重要な意味をもつようになる。今日までの研究資料は、この前提が正しいことを証明している。また賀川、ガンジー、シュバイツァーの生涯も、この前提の正しさを証明しているといえるであろう。彼らは他の人々が自分自身と同様に、あるいは自分自身よりも価値あるものだということを、長年にわたる行動によって示したのである。

3、　愛する者は愛される者のために役立つことをよろこびとする。愛する者が提供するところのものは、愛される者の幸福と進歩のために用いられる。力、時、金、心、その他すべてのものは、愛される者のために、よろこんで捧げられる。すなわち、愛される者から望まれる時には、愛する者は常に相手のために働くことを意味している。単に愛される者の幸福と成長を望むだけではなく、可能なかぎり、その向上のためにつくさなければならない。過去の研究は、この点についても一致した結果を得ているように思われる。

4、　また、愛する者は、愛される者に幸福と進歩をもたらす活動に、積極的に参加しようとする。そして相手の個性を充分に尊重して、その望みをかなえてやろうとする。この点についても、多くの研究資料による充分な裏づけがある。

5　愛は家庭において最も容易に得られるものであるが、家庭外のさまざまな人たちにも分かち与えられねばならない。シュバイツァーの場合には、すべての生きものや、宇宙の創造者（神）にまで愛が示された。同様に、われわれに対しても、他の人々や、あらゆる生きものから愛が示されるであろう。もちろん、他のいくつかの資料によって指摘されているように、純粋で完全な愛は、ごく少数の人たちとの交わりにおいてさえも得られにくいものである。しかし、科学的な理解がよりいっそう進歩すれば、

愛の範囲を拡大することは決して不可能ではない。

6　愛の効用は愛されている者に限られているのではなく、愛する者の成長と幸福にも好い結果をもたらす。すなわち、愛は利他的でも、自己犠牲的でも、利己的でもない。愛する者と愛される者の両者を豊かにする力が愛には含まれている。この事実は、われわれの得ている研究資料では必ずしも明瞭に述べられていないが、その意味は十分に感じられる。

7　両親と子どもの関係、子ども同士の関係、成人相互の関係には、エロティックな要素が多少とも含まれているが、愛は必ずしも性的な力や、ホルモンの衝動に深く根ざしているのではない。どのような人間関係であろうと、創造的な愛の本質には関係がないとフロムは述べているが、彼の見解によって、このような考え方は支持されていると思われる。

8　多くの人々は、愛によって人間性や宇宙を支配する力を理解することができ、またそれらと自己との基本的な関係を知ることができる。このように、多くの人々は愛によって宇宙と人類に対する基本的な理解が可能になり、また神に対する信仰の基礎が形成される。この考えは、すべての資料によって支持されている。たとえば、ブラントは次のように述べている。

「多くの子どもたちは、教会において少年期から、しっかりとした所属感が養われる。この所属感は、家庭において両親から得られるものよりも、不変で確実なものである」注12

その他の資料も、人類と自己との関係や、神が支配する宇宙と自己との関係を理解するのに、愛がいかに重大な役割を果たしているかを暗に示しているものが多い。

今までに指摘した八項目が、愛の本質と、その働きを理解するのに役立つことを私は望んでいる。いうまでもなく、これらの項目は確定的なものではなくて、一つの試案であるにすぎない。もしもこれらの説明が、愛に対する科学的な関心と学術研究とを促進する刺激となれば、この論文の目的は十分に達成されたといえるであろう。

人間の発達における愛情の役割

愛には実体があるのだから、人間の日常生活において実際に役割を果たすことができる。愛の本質に関するわれわれの考え方が正しいとすれば、人間の発達において愛は一体どのような役割を果たしているのであろうか。この質問が今後一〇年間の学術研究によって明らかにされることを私は望んでいる。将来には、この問題に関して多くの専門的論文や著書が出版されることと思うので、それらの学術研究のために役立つような、いくつかの仮説を次に述べてみよう。

最初の仮説は、愛されることによって、人間は基本的な安定感を得るということである。行動や外観に対してではなく、人間そのものが大切にされていると人が感じるとき、本当の意味でのや

すらぎが得られるであろう。乳児期から老齢に達するまで、つねに大切にされていると感じておれば、たとえ人生においてどのような苦しみを経験しても、不健全なストレスに悩まされないで、常に自己の最善をつくすことができるであろう。

第二の仮説は、愛されることによって、自分自身と他の人とを愛し得るようになるということである。話すことがほとんどできない乳児でも、感情移入の能力によって、日常生活を通して愛の本質を感じることができる。また児童期における遊び友だちとの密接な交わりも、自然のうちに子どもの幸福感を高めるであろう。さらに成長すると、異性のいるところではホルモンの変化による落ち着きのなさが目立つようになり、幸福感はますます増大する。そして結婚による生き生きとした生活がはじまるまで、このような状態が続く。最初の赤ん坊の誕生によって、神秘と創造のよろこびを経験し、それから数年間にわたる子どもの養育の過程がはじまる。愛情によるこのすばらしい成長の過程は、幼い時に他の人たちから愛された経験のある者だけに与えられた特権である。かつて愛された経験のない人間は、自分自身を大切にすることも、また自分自身を愛することもできない。このような人間は常に不安定で、自分の価値について疑いを抱かずにはいられない。

第三の仮説は、人から愛されたり、また人を愛したりすることが、集団に対する個人の所属感を促進するということである。いうまでもなく、個人が集団活動において有意義な役割を果たすためには、かなりの知識と技術が必要である。たとえば、集団のならわしや規則に従って行動ができなければならないであろう。人から愛されて育つことと、これらの技術の習得とは、本来なんの関係もないが、愛されたことによって得られた安定感と、人を愛し得る能力とは、集団内において好まれる人格特性をつくりだすであろう。このような幼児や児童は、他の者を支配したり、攻撃したり、敵意をもったり、はずかしがったり、引込み思案になったりする危険性がない。また、このような子どもたちは、他人の失敗や欠陥を追求して、自分を高い地位に引きあげる必要もないであろう。

第四の仮説は、愛されることと愛することが、両親、親族、教師、仲間との一体感を促進するということである。このような一体感によって文化は子どもの人格に容易に取り入れられ、態度と価値観が形成されるのである。愛されていると感じたり、また愛していると感じるときには、相手の人が信じていることを素直に信じ、相手の人から期待されることを学び、また尊敬できる人から励まされると、希望をもって前進する。愛されていない子どもは不安定な感情をもっているため、自らすすんで学ぼうとはしないし、また敵意をもっているので、いわれたことを拒否し、自分の力を試さなければならないような機会を避けようとする。いうまでもなく、愛する人によって有益な経験が与えられ、また学習

が助けられるならば、愛される者は大きな利益を得るであろう。

第五の仮説は、愛されることと愛することが、非常に不愉快な事態に面した場合の情緒的適応を助けるということである。愛されている子どもは、たとえ失敗したとしても、この失敗のために自分の価値について疑いを抱くほど深い傷を受けるものではない。なぜなら、愛情の結びつきがあるので、安定感がくずれさらないからである。従って、失敗をおかしても、子どもはすぐに安心感をとりもどし、なんどでも試みようとする。これとは対照的に、愛されていない子どもが失敗をおかすと、二重の危険性にさらされる。すなわち、従来の不安定感の上に無力感が加わり、そして世の中が、よりいっそう不愉快なものに感じられるようになる。愛されている子どもは、なにかにおどろかされると、直ちに自分を愛してくれる人の手にすがりつき、しばらくすると恐怖の対象に接近して、その原因をつきとめようとする。ところが、愛されていない子どもにとって、恐怖は直視できないものであり、また抵抗できないものである。恐怖の対象は、あらゆる方法を用いて取りのぞかれねばならない。もしも恐怖が子どもの心に残ると、肉体の病気や情緒の障害をひき起こす原因になる。罰や年長者からの要求は、愛されている者には耐えられる。なぜなら、それらのことによって彼らの人間的価値が失なわれる恐れはないからである。従って、年長者からの罰や要求は子どもによって考え直され、その意味がわかると問題は簡単に解決されてしまう。ところが、これらのことは、愛されていない子どもにとっては、自分が拒否され、また不利な立場におかれた証拠だと思われる。その結果、権威に対する怒りと反抗、有利な立場にある友だちに対する敬意、そして自分自身の価値についての疑問が生じる。

結　語

就学前期の子どもの教育における愛情の意義を明らかにしておこう。それは次のように要約できるであろう。

1　豊かな愛情（両親間、両親と子ども、兄弟姉妹間）に恵まれた家庭児は、ナースリースクールや幼稚園において、特別の愛情を必要としない。もちろん、これらの場所でも子どもに愛情が注がれても害がないことはいうまでもない。

2　愛情に満たされない家庭児や、誤まった方法で愛されている家庭児は、ナースリースクールや幼稚園において、愛情にもとづいた個人的な人間関係を経験する必要がある。このような人間関係を経験することによって、将来不適応におちいったり、成人としての愛情生活に失敗したりする危険性が避けられるであろう。

3　ナースリースクールと幼稚園の教師は、それぞれの子どもの行動や欲求を理解するために、家庭における子どもたちの人間関係について、十分の知識をもたなければならない。子どもに接して、正しく指導するためには、どうしてもこのような理解が必

要である。

4　それぞれの子どもの情緒的な生活内容について資料を集めるには、慎重な態度でのぞまなければならない。そのためには、ある程度の訓練が必要である。記録は客観的に行ない、そして記録された資料は、慎重な態度で保管すべきである。すなわち、これらの資料を取り扱う者は、確固とした道徳的な責任観念をもっていなければならない。

5　愛情にもとづいた安定したパーソナリティーの持ち主だけが、ナースリースクールの教師としての適格者である。なぜなら、このような安定感を欠いている人は、ある子どもたちによって必要とされるような人間関係を結ぶことができないからである。

6　ナースリースクールや幼稚園における園長と教師、主任と教師、および教師相互の関係は、暖かくて、協力的で、そして尊敬しあえるようなものでなければならない。教師たちの人間関係のいかんは、子どもたちが生活する園のふんいきに敏感に伝わるものである。

私は、より多くの子どもたちが、愛情と深い理解とによって育てられることを望んでいる。愛は人間に安定感を与え、安定感は他の人に対する尊敬と寛容の精神をはぐくみ、この精神は共通の目的に対する協力心を生み出すであろう。共通の目的に対して共に働くことができることによってのみ、世界の人たちの間に平和がもたらされるのである。自分を愛するように他の人を愛し、そして尊敬できるような、健全で合理的な人間関係の基礎の上にのみ、平和は築かれるものである。

◎注

注1　Ashley Montagu, *The Direction of Human Development* (New York: Harper & Bros., 1955).

注2　Harry Stack Sullivan, *Conception of Modern Psychiatry* (New York: W.W. Norton & Co., Inc., 1953).

注3　H.A. Overstreet, *The Mature Mind* (New York: W.W. Norton & Co., Inc., 1949).

注4　Erich Fromm, *The Art of Love* (New York: Harper & Bors. 1956).

注5　Erich Fromm, *Man for Himself* (New York: Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1947).

注6　T. Kagawa, *Meditations* (New York: Harper & Bros., 1950).

注7　Louis Fischer, *The Life of Mahatma Gandhi* (New York: Harper & Bors., 1950).

注8　注7と同書より引用

注9　注7と同書より引用

注10　Albert Schweitzer, *Out of My Life and Thought* (New York: Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1949).

注11　Harry Stack Sullivan, *Conception of Modern Psychiatry* (New York: W.W. Norton & Co., Inc., 1963).

注12　James Plant, *The Envelope* (The Commonwealth Fund, 1950).

（聖和女子大学・黒田実郎訳）

予防はその何倍もの治療にまさる

キャサリン・ブルンナー

キャサリン・ブルンナーは、メリーランド州、バルティモア公立学校の早期入学許可プロジェクトの企画委員である。バルティモア市公立学校連盟とフォード基金との協力により、一九六二年にはじめられた四歳児の実験計画について述べている。

目のくりくりした四歳のアーネットは、お人形をだいてゆり椅子にすわり、椅子をゆらしながら内緒話をするようにお人形の耳のそばでひっきりなしにおしゃべりをしていた。突然アーネットは椅子をゆらすのをやめた。椅子からとび上がり、次々に、ほとばしり出るように話しかけながら、教師の方にかけ出した。「この赤ん坊が何をしたのか知ってる？　お父さんが出掛ける時にドアをあけっぱなしだったの。そしたらこの赤ん坊は外にとび出して行っちゃったの。雨がふってたのに。あたしずっといろんな所をさがしたの。だけど、どっかへ行っちゃってみつからなかったの。雨はどんどん降ってたの。どこでこの赤ん坊をみつけたと思う？　フォスター通りよ！　道路に出てたのよ！　道のまん中によ！　だからあたしは〝道路にいたらあぶないよ〟っておしりをたたいてやったの。男の子がね、フォスター通りで車にぶつかったの。道のまん中でよ！　それでね、その子を病院につれていくのに救急車が来たの。その子ひどく怪我してたのよ。この赤ん坊は悪い子ね。だからあたし〝もう通りに出ちゃいけません〟っておしりをぶってやったわ。」

アーネットの話すそぶりやしぐさは、彼女の話が実際にあった出来事によるというのを明らかに指摘している。この話は彼女自

身が経験した事実にもとづくものかもしれない。ドアが開けっぱなしで、子どもが家から外にフラフラ出て行く。子どもの事故、これらはたてこんだ都会の下層階級に属するアーネットの住む地域の一面であろう。貧困な環境・多すぎる人間・最低生活を獲得するために夢中で、目前のことにしか関心を示さぬこのような地域では経験の範囲・機会が限定されてしまう。

下層階級の生活状況は、数多くの問題をひきおこす原因である。ひとつは学習の妨害である。都市の住民が学習問題を克服できるように、教育者は関心を示し、特別の計画・教育変革・教材の改善・現職教員の教育・成人の技術向上援助計画などに努力している。数都市で幼児の教育計画のうち問題の予防計画に興味が集中した。これは、個々の可能性を十分に生かし学習に耐え得る教育上の発達的素地を向上させるような経験を提供する計画である。

アーネットは、バルティモア市立学校での経験教育計画である早期入学許可プロジェクトに参加している子である。これは学校への早期入学がこの地域で環境の圧迫の中で学習する際の障害を克服するものか否かを判定するための試みであり、一九六二年秋に公立学校長ジョージ・B・ブラインにより創立され、経費はバルティモア市立学校とフォード基金で共同負担している。

早期入学許可プロジェクトは無償の教育奉仕を必要とする環境の四歳の子どもたちに、より豊かな生活をさせようとする教育計画である。その研究計画は、次のことを究明することである。

・自己統制以外の環境要因により、発達が遅滞している子どもたちの発達を促進する。

・教育価値に関する両親の理解を深め、自分の子どもの教育の責任を両親に痛感させる。

・下層階級の親子の抱負を向上させ、能力段階の改善を援助する。また、学校と地域団体が提携する際の相互伝達を助長する。

早期入学許可プロジェクトの評価のための研究は、研究主事オーランド・F・フルノーの指導のもとに行なわれた。長期間の効果と同様短期間の効果をも測定すべく幅広い研究がなされた。

アーネットは一九六三年二月から、他の三二七人と肯定的態度の発達・知識の拡大・効果的学習の技術習得などの趣旨の種々の経験に参加している。バルティモア市下層階級地域の四小学校にある四つの早期入学許可プロジェクトの実験学級は約三十四年の歴史をもっている。各グループ毎に二人の教師と、定期的に援助する職員一人がいる。二つのセンターでは、子どもたちは午前中のみくるようにし、午後は教師と両親との仕事や、現職教員の教育にあてられている。他の二つのセンターは子どもたちのために午後まで保育を行なった。二つの組織形態は、個々の価値を調査

するための実験として行なったものである。

四歳で入学したら子どもにどんなことが起こるか。

一、子どもたちは、自分がだれであるか、また自分には何ができるかを学びはじめる。

子どもたちが自分についてどう感じるか、また設定された状態で成功する能力についてどう感じるかは成就と重要な関連がある。従って肯定的自己概念の発達は早期入学許可プロジェクトの重要な目的である。自己概念の一観点は自己同一視である。この計画のためはじめて学校にきた子どもの中には、自分の名前を知らない子が多い。その子たちは家庭ではいつも〝おにいちゃん〟とか〝おねえちゃん〟とか呼ばれていた。また近所に移転が多かったり、家族が一か所に短期間きり住まない場合には、子どもたちは〝坊や〟とか〝おちびさん〟とかいわれて、名前で呼ばれるようなことはなかった。子どもたちは自分の本当の名前に全然似ていない呼び名に答えるようになってしまい、時には家庭内での伝達には、全然名前を必要としないこともある。子どもを家の中に入れたい時、母親は子どもの方をにらみつけ〝ここにはいってきな〟と命令するであろう。母親の表情と行動と命令が混合して名前を必要とせずに各々の子に意味を伝える。

学校では子どもたちはそれぞれの名前で、朝、あいさつされ、個人的に話したい時に名前で表現される。子どもの製作品はそれを作った子のものであることを明らかにするようにはっきり名前をはりつけられる。自分の持ち物を置く場所は、個人のものであることが強調されて、名前がつけられている。

子どもたちはあまり鏡や写真で自分を見たことがないので、自分がどのように見えるかわからない。どのセンターにも鏡があるから子どもたちは身体的容姿に気づくようになってくる。また自分自身の写真、スライド映画は、子どもたちの自己承認を強めるとともに、子どもたちが参加した経験を思い出す手助けになる。

このような方法で子どもたちに自分はだれで、どんなふうに見えるかを気づかせようと援助する。この間に個々の子どもは友だち関係の中で常に成長していく。子どもは一緒に遊ぶ友だちの声や表情、自分が話す時の友だちの注目のしかた、特定の状態で自分が答えた時の友だちの反応などから、自分自身のことを学ぶのである。もしも彼の自己概念が肯定的であれば、子どもが自分の興味を表現し、自分の考えを確かめてみ、自分の感情を自由に表現でき、成功感を経験すると共に失敗に打ち勝つことも学べるようなふんいきが大切である。早期入学許可プロジェクトの職員はこのようなふんいきを作ろうとしている。

自己概念の発達過程は、前進しつつあり、子どもの環境の各面の人や出来事に影響されるものであり、自己概念の確立は教育計画と両親教育の種々の面が総合されたものである。

二、自分自身および持ち物を大切にすることに責任を負うことを学ぶ。

子どもたちの多くのプロジェクトは、無秩序な、時には安全を確保しにくいようなきちんとしていない環境からくる。自分の面倒をみることと個々の所有物に関することが、子どもと両親が一緒に働くために必要な関心事になる。

石鹸、タオル、ちり紙、その他身のまわりを清潔に保つための品物は学校で準備してある。これらの品物は、それが何であり、なぜ重要か、どのように使うか、どこにしまっておくか、どのように管理するかなど教師と話し合いできるような少人数のグループで子どもたちに紹介される。

教室ではそれぞれの物をしまっておく場所があり、子どもたちは教師にそれらをどの戸棚に置いたらよいか決めるのに意見を述べる。クレヨンやパズルなどの置き場所は絵で示されていて、子どもたちが使い終えた時に正しい置き場にもどせるよう配慮されている。

教材、教具などの置き場所は、教師の助力がなくとも、子どもたちが一日中いつでも使いたい時に選んで使用し、またもどせるよう低くて手の届きやすい所にする。控え目にはじめることが家にほとんど何も持っていない子を圧倒するという事態を予防する。成長と興味に適した教材が年間で追加される。

三、自分の身心を上手に処理することを学ぶ。

遊具や活動は子どもたちに、歩く・走る・躍ぶ・登る・這うという種々の行動の機会を与え、筋肉を発達させ、四歳児の余分なエネルギーの調整や発散の場を提供する。

また、ごっこ遊びや教材は、新しい考えを試してみたり、感情を表出し、不安を少なくする機会をも与える。

四、より効果的にコミュニケートすることを学ぶ。

ほとんどの文献では学習問題に関係して都会の子どもたちはあまり言語的ではないことが指摘されている。アーネットの話は都会の子どもたちがどんな経験をしているかを例証している。その経験が自分に印象的な時には最も言語活動が活発になるが、幼児のすべてがそうであるように、もっと言語習慣を習得する必要を現わしている。にもかかわらず、子どもは自分から言語表現し、思っていることを伝達できる。その結果、他人に表現する思考・表現のための言葉・自分を友だちや聞いている人に理解してもらえる思考を組織化する能力を与える教育計画の必要性が強調され、伝達各面が早期入学許可プロジェクトにおりこまれている。

子どもは率先的な経験に密接な真のまたは代理の追加経験により強められた豊富な体験に参加する。道路横断に最適の場所はどこか、学校の近くをどんな車が通るか、友だちはどこに住んでい

るか、なぜ近所にたくさんの種類の建物があるかなどを学ぶために近隣地域を歩き、見学する。

農場・空港・小鳥屋・公園・動物園などへの地域外の旅行計画もされるが、消防車が学校の前を通る時・窓ガラスに雨が強くふりつける時・ジェロームが窓の敷居に小鳥がとまるのを見ている時などの身近な経験はいつでも起こる。個々の経験は伝達のための素材を提供する。それに関して子どもたちは物・感情・動作などを正確にあげ、それらを説明する言葉を習う。

概念と言葉の意味は、概念が言葉により同一視されるということからも相互関連がある。例えば〝速い〟〝遅い〟を理解し学ばせようとする時、人と車の動きを観察し、動きと距離により対照させ、理解度をテストするためには劇を使うことができる。言葉づかいは練習の機会あるごとに応用するとよい。

回想と思考構成はより効果的に伝達できるようにし、伝達に答えられるようにする。子どもたちは、テープレコーダー・レコード・絵を用いて出来事や経験・話・詩歌などを回想する。時にせ、これらの出来事は、適当な順序を保持するために整理される必要がある。

五人や十人のグループで思考を伝達することのできない子どもたちは、大きいグループの活動に参加できる自信ができるまで、一対一から、二、三人の小グループでの機会を与えられている。

五、子どもたちは、文学・芸術・音楽の喜び、美を経験する機会を持つ。

どんな人でも、あらゆる場所を訪ね、すべての風景を心にとめ、興味あること・喜び・悲しみを全部経験したりするというように生活のすべての経験をすることは困難である。しかし、本を通してなら、各方面に視野を広めることもできるし、豊富な経験や知識を得ることもできる。喜び・興奮・情緒の源として本に接した時、子どもの知的・感情的・社会的視野は大きく展開することが期待できる。

童謡・詩・昔話・現実的話・実際の素材は子どもたちと分かちあい、その反応は批評、話の反復・劇遊び・芸術的表現から知ることができる。本での経験は読むことの学習への興味、よい文学への愛を養い、本が提供する情報に創意的に気づくことの刺激になることが望まれる。

種々の絵画製作材料を使用することは、子どもに思考や感情を表現するもう一つの機会を与える。特に言語で自己表現することが難しい子たちにはよい機会である。子どもたちは物を媒介として試す機会があるから、それを解釈する考えは、現実のまたはそれに代わる経験から得られる。行動や感情を代弁する歌やリズム表現、楽器演奏は、知識や技術の取得と同時に自己表現の場でもある。

六、自分の住む世界への認識を発展させる機会がある。

困窮地帯からの子は、概念発達の障害、遅滞をひきおこす環境要因の中に住んでいる。貧困のため手に入れられる品が減らされ、視覚的にでさえも幅広く種々の対称物を見る経験が不可能になる。ある子は外出の衣服がないためや、大通りで災害にあうことへの不安からほとんど一日中薄暗い混雑した家の中で過ごすことがある。それ故経験はかなり限定されている。家庭に読み物の数は少なく、または全然ないため、本を通して経験する可能性も少なくなる。どんな方法を通してでも、全然経験したことのないことは話したり理解したりしにくい。周囲の物を指示するために、大人も時々漠然としてわけのわからない言葉を使うから、子どもたちは周囲の物、人の正しい名前に接することをしない。例えば、子どもの椅子の下に靴を置かせたい母親は、「それをそこに置きな！」というであろう。数多くの親たちは、子どもと一緒にすごす時間が少ないため、子どもたちがどのようにして学んでいるか知らない。従って子どもたちが周囲の各面に気づくよう手助けしない。環境的に虚弱な子が学校で学習する場に直面した時に、教師の話すことがほとんど理解できないために困難を経験する。彼らの言語能力は非常に限られており、教師にわかりやすいものでも、それぞれの場で反応することが不可能になることがある。学習情況での概念は真新しいものであり、内容は無意味なものである。自己表現できる正確な概念と言語の発達を助長する経験を提供することは重要なことである。

もしも質問し、問題の原因を探究し、考えを試してみ、関係について調べられるよう励ましがあれば、日常茶飯事ですら子どもたちに環境の正しい理解を発達させる機会になる。

ある日、子どもたちが学習時間の後で片づけをしていたら、小使いさんが二つの大きな包みを教室に運んできた。好奇心の強い子どもたちはすばやく、この不思議な包みをとりかこみ質問を連発した。「何だろうこれ？」「いつになったらこの包み紙をはずせるんだろうなあ」「何がはいってるのかしら？」教師と子どもたちが包み紙をはずしてみると、穴だらけの大きな板があった。子どもたちはその板の形、大きさ、色について話し合った。子どもたちは持ち上げてみて重いことに気づいた。「どうしてこの板穴だらけなの？」「穴の中に何入れんの？」「この板どうするの？」と再び質問が投げられた。小さい方の包みを開いて、その中に割れ目のあるブロックを発見した。その板は割れ目にぴったり合い立つことに気づいた。他の小さい箱に金属の鉤と針金がはいっているのをみつけた。鉤を調べてみて、子どもたちは穴へのとめ方を発見した。「そうだ、この鉤に物をかけられるんだよ！」とじっと見ていた子がいった。どんな物をさげられるのかと洋服・人形の服・楽器などをためしてみた。そして穴だらけのこの板は品物を片づけておくための板であることがわかった。

子どもたちが学習過程に活発に参加するに従い、大きさ・色・形・機能などの概念を形成するようになってくる。概念は個々が理解を広げ、知識を組織化し、新しい場面に適用し、新しい考えを容易に理解できるようにする。

七、子どもたちは数量的関係を理解しはじめる。

自転車が何台あるか。同時に何人の子どもが乗れるか。いくつのビーズでひもがいっぱいになるか。だれが一番背が高いか。トマスより背が低いのはだれか。ポストへ行くのに近道はどこか。箱を作るのに積木がいくついるか。

このような事柄を考えながら、数量に関する言語・思考関係が、子どもたちに意味を持つようになってくる。

八、子どもたちは個人として、グループとしての両方の努力に満足を感じる。

生活を通して、子どもたちは目標に向かってのひとりでの活動をグループでの仕事に役立つように組織化し、それから満足感をひき出す必要がある。小さい子どもたちは見聞きする時間と、自分の選択で自分のペースでそれらを考え、材料を試してみる時間が必要である。また同時に、友だちと一緒に使ったり、一定時間順番を待ったり、一つの仕事を友だちと協力して一緒になしとげる機会も必要である。早期入学許可プロジェクトは、子どもたちに個々の興味と発達を助長し、グループでの技術を発達させるという種々のチャンスがある。

両親教育の計画はどんなものか

早期入学許可プロジェクトは、両親が教育の価値を理解することの重要性を認め、両親が子どもの教育に責任を自覚できるよう尽力している。両親活動は形式化されていないが、両親が意義を認めるよう意図している。グループ活動は教師が家庭訪問の際に受けた質問や、日頃の話し合いでの問題と同じ関心をもとにしている。両親との活動は次のように発展した。

・教師と親が学校のはじまりか終りに、子どもの向上に関して個人的に話し合う。
・家庭訪問により教師と親との親しみを増し、子どもの成長した環境を理解する。
・教師と両親の、学校での研究会。
・親たちが子どもの活動を見学しに学校を訪問する。
・親が子どもの旅行に同伴する。旅行はある親には新しい経験であり、近隣の設備などで今まで気づかなかったことに目を向けさせる動機を盛り込んでいる。
・親たちは種々の技術を学ぶグループ集会に参加する。

予防の教育計画としての、早期入学許可プロジェクトは、どの程度の意図を達成したか。

時間と縦の研究がその解答を与える。実験グループの子どもたちは、

・引き続き幼稚園に入園するため、早くから連続教育を経験する。

・不適応問題をとり去り、言語能力が向上し、グループ参加の技術が発達し、独立心が認められた状態であり、幼稚園生活を、明らかにスムーズに始められる。

・小学校に定期的に出席する。

・発達的素地測定の際、好成績を示す。

・読書開始がスムーズである。

早期入学許可プロジェクトの職員たちは、何倍もの治療よりも、子どもたちに実際経験させることを援助していると確信している。しかし四歳一年間の教育経験は、後においてのよい開始をはかどらせたにすぎない。子どもの教育は各分野で継続し協同で努力すべきものである。実験計画は必要な部分に注目し、必要なものへの答を提供する。両親と教師が共同して子どもたちの目標達成を助力する時、より完全な解答が展開される。はじめの意味での予防は、アーネットたちの早期入学許可プロジェクトの参加者たちに適用された。現在私どもが直面している問題は効果的予防法を決定し応用することにより、アーネットや他の子たちが後で何倍もの治療の必要がないようにすることである。

（茨城県　小友幼稚園・福西百合訳）

子どもたちは生活の中で学ぶ

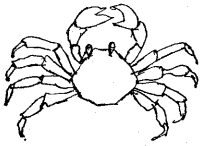
もしも子どもが批判とともに住むならば
　彼は人を責めることを学ぶであろう
もしも子どもが敵意とともに住むならば
　彼は争うことを学ぶであろう
もしも子どもが嘲笑とともに住むならば
　彼は恥ずかしがることを学ぶであろう
もしも子どもが寛容とともに住むならば
　彼は忍耐を学ぶであろう
もしも子どもが奨励とともに住むならば
　彼は自信を学ぶであろう
もしも子どもが賞賛とともに住むならば
　彼は真の理解を学ぶであろう
もしも子どもが公平とともに住むならば
　彼は正義を学ぶであろう
もしも子どもが安定感とともに住むならば
　彼は誠実を学ぶであろう
もしも子どもが承認とともに住むならば
　彼は自分自身を好むことを学ぶであろう
もしも子どもが受容と友情とともに住むならば
　彼は世界の中に愛を見出すことを学ぶであろう

――作者不明――

対立意見についての話し合い

ルビー・フレッチャー

元ユタ大学（ソルト・レーク市）付属ナースリースクール、幼稚園、小学校低学年の教師。
現在ユタ大学教育学講師。



ナースリースクール、幼稚園、小学校一、二年で対立意見を問題にするかとおっしゃるのですか？　そんなに幼ない経験に乏しい子どもに……と？　そんなことが子どもの問題になるでしょうか……と？

もちろん！非常に幼い子どもにとって相対立する性質をもった重大な問題、つまり明白な回答を持たない問題で、彼らが成熟するにつれて違った形で幾たびも幾たびも考えなおさなければならない基本的な人間関係に関する問題がある。幼児にとってもっともむずかしいことは、この世界には矛盾対立というものがあり、それがいつまでもつづくのだということを知ることである。

二歳から七歳の幼児は、未熟さと経験不足の故に、断定的な結論や、画一的な行動を要求する。「今、ここで」即座に「白黒をつけたい」という要求は、教師をしばしば困らせる。幼児期に基本的な態度や概念形成の時期であるので、このようなときに教師がどのような態度をとるかということは重要である。

すべてのとはいわないが、家庭で教える空想物語のあるものは、学校場面では扱いにくいことがある。その例をナースリースクールにみよう。

『十二月はじめのある日、四歳のジュディがナースリースクールの遊戯室にはいって来て大声でいった。「ミス・サンダー

ス、ママとパパがいったわよ。うちの子たちにはサンタクロースのつくり話はしないって。プレゼントはママとパパがくれるのよ」

四、五人の子どもがジュディの方をみたが大部分の子は無頓着に遊びつづけた。

ミス・サンダースは「ジュディ、去年のクリスマスのことおぼえてる？」と応じた。

「ええ、おぼえてるわ。大きなツリーと、あかりがあった。あたし泣くお人形もらったし、それから……」

ミス・サンダース「あなたのおうちたのしかったでしょう」

ジュディ「ええ、クリスマスが早く来るといいな。おままごとのお皿がほしいの。それに……」

ミス・サンダース「そうね、ジュディ。ママとパパはクリスマスを子どもたちみんなに楽しくさせようっていろいろ考えていらっしゃるのよ。あるおうちではサンタクロースをたのしみのひとつにするけれども、またあるおうちでは、べつのおもしろいことをしてたのしいクリスマスをするのよ』

あとでミス・サンダースはひとりになったとき、さっきの場面をずっと考えてみて自問した。自分はジュディに助けになるように答えてやっただろうか。ジュディのいったことは、他の子どもにどんな影響を与えただろうか。

二歳児、三歳児、四歳児は大てい自分のことにいちばん関心があることをミス・サンダースは知っている。それぞれ、自分の家族のことを、よそのうちとはずいぶんいろいろな点で似てはいるが、やっぱりちがったところがあることを理解している。それぞれの子どもが家族に好意をもち、自分の家庭が教師から尊敬されていると感じていることが大切である。家庭の行事や儀式は、楽しみと愛情を計画し、わかちあうための重要な生活である。各人に与えるそうした出来事の影響そのものに比べれば形式などはたいした問題ではない。

サンタクロースの空想物語ばかりでなく、イースターの兎、歯の妖精（ツース・フェアリ）など多くの子どもが信じ、やがて成長とともに顧みなくなるものがある。ミス・サンダースは、自分のクラスの子どもたちが提出するたくさんのちがった家族のパターンに敬意を表わしていることを示したいと思った。

しかしまた彼女は、幼稚園が、正確な有益な知識を与える源として信頼するに足るものであるとのイメージを幼児に抱かせたいとも考えた。彼女はわざわざ空想を起こさせたり、不必要に助長したりすることはせず、ひとりひとりの子どもに個別に応対し、家庭の経験から満足を得られるように援助しなければと考えた。ナースリースクール場面の非画一性は、子どもたちに最大限の個人的反応を許すものである。

イースターの空想物語

幼稚園および小学校一、二年の教師は、集団討議の形で空想物語を扱うことが必要だということをしばしば感ずる。次に述べるのは、ミス・グリーンのイースターのころの一年生の場合である。

『子どもたちが、集団計画と討議の時間に集まったとき、ひとりの男の子が教師に対して発言した。「ミス・グリーン、ゲリーはイースターの兎なんていないっていってるよ。ほんと？」クラスは静まりかえって、ミス・グリーンの答に熱心に聞きいろうとしているようであった。

「ええ、たしかにイースターの兎のお話はあります。そしてたくさんのおうちでイースターに兎で楽しんだり、さわいだりすることがあるでしょう。ゲリー、あなたのおうちではイースターの兎でおもしろいことがある？」

ゲリーは家でのイースターの朝のことを話した。ついで他の子どもたちもイースターのおもしろかったことを語った。クラスのものは皆が報告したいろいろなやり方を受けいれ楽しんだようであった。ある話にはイースターの兎が出てきたし、あるものにはそれがなかった』

あるひとりのおとなの参観者は、それでは子どもたちの興味を殺いでしまうからといって、そのようなことで子どもたちの頭を曇らせてしまうことはゆるし難いと批判してきた。ミス・グリーンは、彼女のクラスの子どもの大部分はイースターの兎はあそびであることを知っているのであり、ゲリーはクラスの中では幼いほうの子であることを説明した。いろいろなおりに、子どもたちは彼の幼さに同意を示さないことがあった。だからもしも彼がほんとうのイースターの兎を信じるとかたく主張したら、彼らにまたからかわれるかもしれない。そうしたら、教師は彼を困らせずにすむようにしてやり、彼が支えを求め、助けをねがえばいつも、空想と現実とのすきまを埋めてやって、信頼するに足る学習源としての教師の役割を確実に遂行するであろう。この場合は、イースターについて多くの違ったやり方が報告されたので、ゲリーのイースターは他の子のと非常に似ていた。多分ゲリーにとってイースターの兎はそれほど重要でなくなって、家族の催しの全体の方がだんだん重要になってくるであろう。それがミス・グリーンの希望であった。

たしかに、空想のごっこあそびはおもしろいが、ある子どもらにとってはそれが本当ではないことに気がつくときがある。教師はそのときの苦痛をやわらげてやるようにしなければならない。

家庭によるやり方の違い

幼児にとってめんどうな問題は、家庭による育児法の違いから起こってくる。毎週のおこづかい、子どもがひとりでいける範囲、自分でやることを奨励されることなどに関する家庭のやり方の違いも問題の起こる源になる。次のことは、ミス・ベネットの幼稚園で、学年末に「わたしの家族」という短い単元をやったと

きに起こったことである。

『この勉強のある部分は、ミス・ベネットのノートの中に「うちの家族についての問題」と題されている。子どもたちは家族の他の人たちに対して問題を起こしてしまったような行為とか、彼らが困った問題について話をした。ミス・ベネットの助けで、どうしたらその問題を解決することができるかを話しあった。ミス・ベネットには次のようなことがわかってきた。すなわち、子どもというものは友だちが持っているものを何故自分が持つことができないのか、また友だちがしてよいことを何故自分はしてはいけないのかを理解することが特にむずかしい。ミス・ベネットは彼らに自分の問題をより広い観点からながめさせるようにしてみた。たとえばジミーが近所の友だちのマークと同じように、一週に二十五セントのおこづかいがもらえないことにたいへん不服を示していることから問題が起きていることを述べたとき、ミス・ベネットは、もしそれだけのおこづかいがもらえたらどうしたいのかときいた。彼は、そうしたらキャンデーとお店でみたおもちゃの飾り物を買うんだと答えた。ミス・ベネットがそういう飾り物やキャンデーを買ったことがあるかとたずねてみると、お買物にいったときたのめば、お母さんやお父さんが買ってくれると答えた。でももしおこづかいがあれば、もっと始終、もっとたくさんのものが買えるだろうというわけであった。そこでミス・ベネットは、二十五セントのおこづかいをもらっているマークに、それをどうやって使ったかたずねた。マークは五セントは銀行に預けるし、欲しいものでもあまり高いのでたくさんのものは買えないといった。小さなトラックや飛行機が買えるようにたまるまで長いこと待たなければならなかった。また、キャンデーを家中の人に分けて上げるのでなければ、お金をみんなキャンデーにつかってしまってはいけないとお母さんがいうのでそれもすぐなくなってしまったとも話した。そこでおこづかいをもつだけでは、ほしいものがみんな買えるわけでなく、またすべての問題が解決するのでないということが子どもたちみんなにわかった。みんなで、見たものは何でもほしくなることについて話し合い、思うようになるということはむずかしく、また待つこともたいへんむずかしいものだとわかった。』

この問題に限らず、他の問題についても、どの家のやり方、考え方がよりよいかを決めることはできないように思われる。子どもらのすべきことは、彼らが経験した場面に処するよりよい方法をみつけることなのである。ミス・ベネットのクラスでの話し合いは、自分自身の感情や行動の理解を進める上に役立ったであろう。あるいはまた意見の対立や葛藤からくるフラストレーションを処理するためにもっと違ったやり方を見いだすのに役立ったかもしれない。またねがわくは子どもたちが自分とは違った見方に気がつき、その人にとっては違った考えが価値があるのだという

ことをわかるようになってほしいと思う。

要するに、二歳から七歳までの子どもの対立する意見は、どのように取扱ったらよいものであろうか。

教師は多くの仕方で、子どもに個人的に応対しなければならない。教師は批判をぬきにして、それぞれの場合のその家庭特有のやり方を受容しなければならない。子どもたちの関心の的となっているように思われる問題は、十分に話し合う時間を与えるべきである。空想と現実と両方とも価値があることを認めながら、二つを区別していくことを助けなければならない。教師が自分の好きなやり方をお手本として掲げることは、差し控えなければならない。

各年齢の子どもの教師は、家族内の経験を積極的に学習することを進め、対立する意見に結びついた知識を深める責任があるし、またその機会を持つようにしなければならない。子どもが世界を正しく理解して行動するようになるのは、こうした初期の経験と概念をもとにしてのことなのである。

× × ×

すべての子どもは成長したいという基本的衝動をもつ――それは彼がなり得るものになろうとする努力、もっと自分らしくなり、もっと豊かな、完全な自己となろうとする根本的な努力である。この努力は各人の個人の内側の世界で起こる。どのようなものになるかは、この内側の世界を特徴づけている人間関係条件、経験の豊かさに依存している。

創造的な自己、積極的な自己、内的力をもった自己は、あたたかい支持的な永続的な人間関係をとおして発達する、この発達はこうした相互作用、人間関係の値の如何による。人間関係の基本的要因は、個々の子どもが、特に家庭や学校における重要な人々によって真価値を認められていると感ずることである。

子どもの生活において重要である他人から完全に受容され、重要な人々によって価値を認められるならば、子どもは自己を受け容れることができ、自己自身に満足することができ、安全感をもつことができるようになる。それに加えて、このような過程によって、子どもはまわりの世界が価値ありとするものの内容を知るようになり、子どもの才能や能力を発見し、発達させ、表現させる道が開かれる。こうして、成長への衝動が育まれ、生き生きとし、のびのびと発達しつづけるのである。――H・ガーソン・モーガン「家庭および学校における自尊心の養成」子供の教育、一九六二年二月、二七八頁

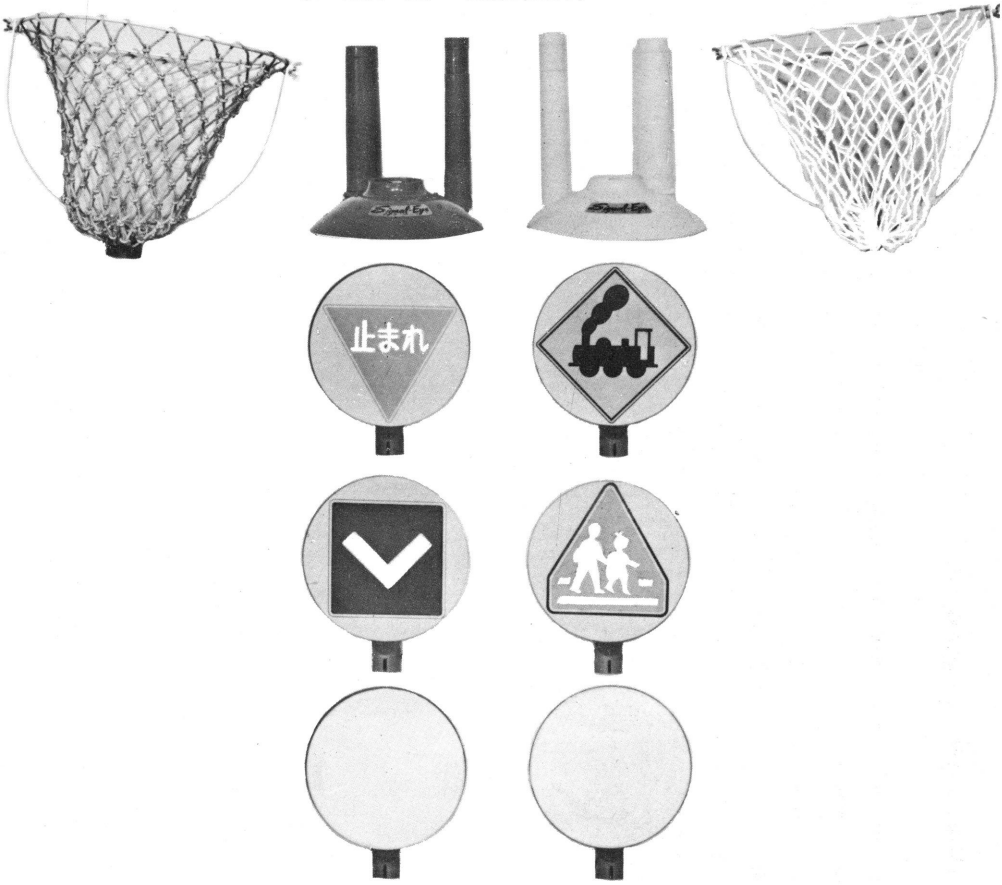
（川村学園短期大学・帆足喜与子訳）

16種以上の
遊びができます
キンダー
シグナル
アイ
新発売
運動具研究会推選
遠山喜一郎・加藤孝吾
田中次雄・玉越三朗
村田修子・青木きみ
斎藤敏夫・宮内孝の各先生（イロハ順）
発売
ブレーベル館
創業60年
Signal-Eye

●辨慶の７つ道具などは、むかしむかしのこと、現代っ子の遊び道具は機能的な上にプラス美しさとスマートさ。

●旗立て・標識・輪投げ・高とび・バトン・球投げなどいろいろな遊び道具に早がわりします。これを使いこなせるのは現代っ子だけ！　辨慶さんもキットくやしがるでしょう。

●１セット　紅白スタンド各１本・紅白ネット各１個・標識板６枚（交通標識８種４枚・白板２枚）　**定価５,０００円**



ナースリースクールにおけるしつけ

キャサリン・H・リード

しつけというものは、子どもに、自分の責任を認知させることに役立つものである。ナースリースクールにおけるしつけについてのこの記事は、あらゆる年齢の児童を扱うおとなにとって、重要な意味を示している。キャサリン・H・リード女史は、コーバリスの、オレゴン州立大学、家政学部所属ナースリー・スクールの主事である。

「ナースリー・スクールでは、子どもに何でもしたい放題にさせているそうですね」「ナースリー・スクールでは、しつけはしないことになっているそうですが……」ナースリー・スクールの先生たちはだれでもこうした言葉を、いつかは聞かされているものである。ナースリースクールに行っている子どもの親たちの多くは、いろいろ批判を聞いて動揺する。小学校の多くの先生たちも、ナースリー・スクールでは、一体どういうしつけをしているのだろう、と不審に思っている。

もちろん、こうした発言にたいして、でき得るのは、「私たちは、しつけがよいものであると思っているのは当然で、もししつけをしないとすれば、どうやって皆が一緒に生活していけるでしょう」と答える以外にはない。

本質的な問題点はどういうものか？

通常、しつけに関する問題は、昔ながらのよく知られているしつけの方法が行なわれていない時に、どういう方法がとられているかということを認識することにかかっている。

私たちは皆、しつけはすべきものだと思ってはいるが、果たして、しつけとは、どういうものであると考えているのだろうか？罰の形で与えられるしつけ――たとえば叱るとか、おいしいもの、

楽しいことを拒否する、取り上げるなどは、私たち全部がはっきりそれとわかるものである。しかし、しつけが他の形で示される時、悪い行いをさせないようにして、効果をあげた場合とか、また、思いやりのある扱いをした場合には、時として、見すごされてしまうことがある。ひとりの子どもが、他の子どもをぶっても、その子どもが親切に扱われているのを見ている人は、そこに実際に何が起こったかは見落としていることがある。その人は、いつも見慣れている罰が与えられなかったことだけに気付くかもしれない。

きびしい、ボス的なタイプのしつけから、大きくゆれ動いて、最初は、文字通りに、〝子どものしたい放題にさせる〟容認主義に移ったことがあった。ちょうどこの頃、ナースリー・スクールの数も増加してきた時代だったので、昔流のしつけのしかたから大きく移行したこの変動が、人々に強く印象づけられたのである。ナースリー・スクール関係の人々は、この両極端から中道に戻すために、苦労して、自分たちの流儀を求めざるを得なかった。またしつけとは、どういう意味なのか、その意味づけを再検討する必要があった。これらの人々のたどった経験は、他の先生たちにも役立つことであろう。

ふさわしいしつけをすること

今日では、ナースリースクールの先生たちはどういうしつけをしようとしているのであろうか？

まず第一に、私たちは、子どもに合うように私たちの要求をだんだんに減少させていくことを学んでいる。これは他のことはあとまわしにしておいて、一時にひとつの事柄を習わせることだけに集中するという意味である。たとえば、ひとりの子どもが、家庭で新たに生まれてきた弟や妹の存在に適応しようとしている時には、おそらく私たちは、その子の気に入りのナースリー・スクールの玩具を、他の子どもと共用するように強制することはしないであろう。彼が家庭で必然的にしなければならない共有という重荷を軽くしてやるために、この時期には少しばかり〝利己的〟にさせておくこともあり得る。今は、生まれた赤ちゃんと気持ちよく生活することこそ、まず第一にしなければならない骨の折れる仕事なのである。

子どもによく合ったしつけをするということは、どんなことがまだ学びとれないかを決定するのと同様に、今どんなことが一番学びやすいのかを決めるという意味である。正常で健康な二歳児ならば、何でも物に触れてみたいというすさまじい衝動をもっていることは私たちは皆よく知っている。二歳児のグループでは、先生は、さわっていけないものは黙って静かに、手のとどかない所に片付けてしまう。もちろん、ある時には、子どもたちは、物

に触れてはいけないことも、習わなければならないことではあるが、こうしたことを学ぶのは、二、三歳児よりは、四、五歳児の発達の様相にずっとよくあてはまる。

二歳児に物に触れるなといってしつけることは、お行儀のよい子にするよりはむしろ、自発性のない子どもにするようになるであろう。

よいナースリー・スクールでは、物にさわったからといって、小さな子どもが罰せられるようなことはない。その代り、多分、先生が、子どもと、そうした誘惑との間に立ちふさがっていることに気づくことであろう。では、何の訓練もないといえるだろうか？　先生は、その子どもが、自発的な、自信のある人間でいられるような援助をしているのである。まず第一にすべきことをまっ先にすべきである。

また同じように、子どもが食べ物をこぼしたり、食べる時に、指でつまんだということで訓戒が与えられもしない。ナイフやフォークを上手に使いこなすには、筋肉がまだ十分に発達していないからである。しかし、テーブルの隣りに腰かけている子どもを、絶えずつついたりしている子どもは、すぐ制止されて、多分、もっとちゃんとしていられるような場所に移されてしまうだろう。言葉をかえていえば、その子どもが自分でどうにかできるレベルまで問題を引き下げるということである。

これはまた、個々のケースによって、それぞれの事情は変わってくる。ひとつの事例を示すならば、ベッツィという女の子は、りこうな三歳児であるが、二歳上の姉の支配から逃れようと必死になっている。姉のほうは、たいへんに嫉妬深く、家ではベッツィのする一挙一動を、ほとんど自分の思い通りに服従させることでそれを表現しようとしている。ナースリー・スクールの自由さの中でベッツィは、ほっとして、くつろぐことができるが、ちょっとでも何か支配的に思えることがあれば、敏感に感じとって、憤慨する。

ある日、何か気に入らなくて、カットなって、本を床に投げつけた。先生は静かに、「机の上に、本を拾っておのせなさい」といった。ベッツィは、むっとして、「いやよ！　いつもあなたのしたようにはできないわよ」といった。

人はいつも誰かに支配される必要がないということを、その子どもが何とかしてわからせようとしていることが理解できたので、先生は次のように答えた。

「それは本当ね。できませんね。では今度だけは先生が自分で拾いましょうね」何のしつけもしていないのだろうか？　あるいはそうかもしれない。しかし、そうすることで子どもの反抗心をやわらげ、そして、そのうちいつかは、自尊心と、自信とをたやすくもてるようにしていることになるであろう。

許せる範囲、限度についてははっきりとさせること

ナースリー・スクールでは、私たちのきめる制限については、はっきりとさせ、そして事情のゆるす限り、一貫性のあるものにしようと努めている。きまりを守るという点では、子どもに何を期待しているのか子どもにはっきりさせること――私たち自身にもはっきりとしているのと同様に、子どもの心にも、はっきりと納得できるようにすることだけが問題であることが、意外なほど多いものである。

また私たちが気づきはじめていることは、子どもたちは、制限をすることに進んで責任をとるおとなと生活する場合には、ずっと自発的で、創造的になり得るということである。安全な制限内に自分がいると確信がもてる時には、どんな子どもでも、もっと自由に、いろいろ探求しようという気になるものである。

幼い子どもというものは、激しい感情をもっているが、この感情を抑制する能力はほとんどない。したがって、ぶったり、かみついたり、物を投げたりしがちであり、その後で自分のしたことにおびえるような始末である。

自分たちが行き過ぎないうちに、止めてくれるおとなに依存することができるとわかれば、安心もするし、もっとのびのびとふるまえる。子どものする無分別な、破壊的な行動の多くは、誰かが、自分たちを戒める責任をもってくれるだろうという時点を正に求めているとみることができよう。自分がいうことを聞かず、いたずらをしたと思っている時には、罰してほしいと望んでいるのは、子どもとしては、異常なことではない。すべての良い親や先生たちと同様に、ナースリー・スクールの先生たちも、筋道の通った制限を与え、それを守ることに責任をもとうとしている。

規則や習慣などに一致する行動をさせるには、時を与えること

ナースリー・スクールのしつけには、順応を必要とする時には、それだけの時を与えることも含まれている。昔ふうのしつけは、即座の、絶対服従ということを強調していた。しかし今日では、先生は、「外に出る前には、ブーツをはかなければいけませんよ」とはいっても、子どもが早速とんで行ってブーツをはく、とは思っていない。事実、もし子どもが逆っても、驚くことはない。もしブーツをはかずに外に出ようとすれば、おしとどめて、規則をくり返し子どもに話して聞かせるが、子どもが自分なりの時をかけて、それを受け入れて納得するまで、子どもまかせにしておく。

それもやはり、しつけである。というのはブーツをはかなかったら、外には行かせないからである。

こうした時、子どもはひどく感情的になって、先生は嫌いだと

いうかもしれない。これを見た人は、これこそ、子どもがやりたい放題にしている例だというかもしれない。しかし、子どもが好き勝手なことをするのを許されないからこそ、こんないい方をするのだ、ということをみなさんは覚えていてほしい。

先生は、ちゃんと統制はとってはいるのだが、子どもが自分の感情をありのままに出すことには、全く自由にさせているのである。人間の行動に関するいくたの研究から、私たちが習得したものがあるとすれば、それは、感情は、表に出してしまう必要がある、ということである。感情を自分の中にしまい込んで押えてしまうことは、人々を意地悪にしたり、また後になってから、危険な人物にさえするものである。よいしつけこそ、害を与えない方法で感情を表現する道を開くものであって、感情の吐け口をふさいでしまうものではない。

それだから、〝ひどい先生〟と子どもにいわれても先生自身は怒ることもないし、失敗だとも思わない。もし経験をつんだ先生であれば怒らずに次のようにいうだろう。「あなたがブーツをはかずに外に出ようとしているのに、私が行かせないから、悪い先生だって思うのは、よくわかってますよ」そして先生は、多分ブーツがきつくてはきにくいし、どんなにか外に出て、ブランコや三輪車に乗りたいだろうとこの小さな人に同情をする。そこで、何とか、もっとやさしくする方法を講じようとするだろうし、またその子どもが思ったままの感情を〝吐き出す〟ことができたのはよかったと思っている。

が、しかし、やはり規則として、ブーツをはく、ということは守るであろう。このことは、訓戒はほとんど与えられていないともいえるが、しかしこれが、形の違ったしつけなのである。

もし子どもが他の子どもをぶつことで、自分の怒りを〝発散〟させようとしはじめたら、先生はすばやく、またきっぱりと止めてしまう。先生は子どもが怒ったことに対して非難することはないが、その表わし方としては、害のない範囲の中で処理するよう子どもに力を貸そうとする。言葉は、子どもの発達段階にふさわしい感情表現の無害な吐け道である。

もちろん、四歳ではなくて二十四歳にもなれば、自分の上役に、自分がどう思っているかを口に出していうことはできないのは当然だが、その頃になれば、自分の感情の吐け道としては、他の方法が開けているはずである。音楽や、芸術または運動にそうした感情の吐け口を見出す時は、それを昇華とよんでいる。しかし三歳や四歳の子どもであったら、彼の前に開けている直接の道を選ぶしかない。年齢相当の行動に出るより外にはない。

子どもは許される範囲の限度をためしている。

しつけに関する最後の問題としてつけ加えることは、ナースリ

ー・スクールの先生は、子どもが自己主張をしたがったり、先生のきめた制約を〝ためし〟たいという止むに止まれぬ気持ちを尊重することはあっても、そうした場合に「いけません」ということを恐れはしない。

健全な子どもなら、時には、〝そんなことは嫌〟といって、いうことを聞かないこともあろう。あるいは、〝あっちへ行け〟とはねつけたり〝したくないよ〟と反抗することもあろう。先生は、たとえその反抗を行動に出すことを許さないとしても、その反抗はたいせつなものと見なすであろう。たとえばおひる近くなって、園がひける時になったら、いくら子どもが帰りたくなくても、子どもは帰らなければならない。その場合、先生は子どもが行きたくないという権利は尊重しつつも、彼が帰れるように力を貸すことになろう。子どもの感情や行動に対して、〝いうことをきかない、わんぱくな子〟ということもないし、〝はずかしめる〟ようなこともしない。

むしろ、子どもが人に左右されずに自由に行動できる人になりたいと望んでいる点を喜んでいる。

このようなしつけは、子どもにとっては、信頼できる権威によってきめられた必要な制約と共に、自分自身をも受け入れることを、ずっとたやすくしてやることになる。まただんだんと精神的に成熟するに従って、自制心を働かすようになるのにも、むずかしくなく達成できる。反抗は子どもには健全なものであるが、しかし、それを容認することで、妥当なしつけを維持するという私たちの責任が軽くなるものではない。

子どもが、一生懸命に、自立しようと努力している時には、昔ふうのしつけ方はしばしば子どもに、屈辱感を与えるものである。それに比して、新しいしつけ方は、自主性を望んでいることに対しては尊重されていることを彼にわからせるようにしむけるものである。ただし、その同じ自主的な自己にしていくためには、世間の人々に受け入れられる方法を見つけることを、当然強調しているのである。

さて、簡単に要約してみるならば、今日ほど、しつけが重要視されることはなかったように思われる。私たちが実際に行なっている方法は、目標に達していないことも多々あるけれども、それでも、しつけの仕方にはいくぶんの進歩を遂げている。しつけは、現在では新しい形をとってきつつあるから、子どもを扱うすべての人々は、その新しい形式を十分に理解するように学ぶことが肝要である。両親も、先生も、しつけの問題に関して、共に緊密に手を携えていくならば、どの子どもにも力になり役立つことになるであろう。

（日本女子大学・宇川和子訳）

ナースリースクールで

サラー・ロー・ハモンド他

（註）フロリダ州立大学（所在地テラハシー市）教育学教授サラー・ロー・ハモンド、同大学、家庭および家族生活学教授ルース・ダレス、マイアミ大学（フロリダ州、コーラル・ゲイブルス所在）教育学教授アルマ・W・ディビッド、フロリダ州立大学付属校ルシー・ハリソン、フロリダ大学（ゲイネスビル所在）ビーケー・ヨーンジ学部ルシー・ヌルトン、バームビーチ郡立学校指導主事エドナ・パーカー、フロリダ州立大学校外指導教師ドラ・サイクス・スキッパー共著、「子どもたちのよき日日」より

あなたは四歳児にむかって、「あなたはどうしてナースリースクールにいきたいの」と尋ねてみたことがあるか。

それに対する子どもの答は、「ここがおもしろいから」とか、「私はほんとに来たいんだ」とか、「遊ぶものがいろいろあるから」とか、「ボビーやジーンやその他の子どもたちと遊びたいから」など、さまざまであろう。この年齢の子どもたちには、自分がなぜナースリースクールを好むかという理由を十分に述べることは無理である。教師たちもまた三、四歳児にむかって、ナースリースクールの目的や、そこでの「よい日」について、説明することは、困難であろう。それぞれの日は違うが、どのよい日にも子どもと親がよい日だと認める何かがある。

一般にナースリースクールは、大部分の子どもたちにとって、他の子どもと交わる最初の集団である。それを考えるとき、われわれは、そのような子どもたちがお互いにどんな反応をしあうかに注意しはじめる。三歳児が自分と同年齢の他のものと顔を合わせたときには、何が起こるだろうか。

彼はおもちゃをひったくったり、人形コーナーで赤ん坊になることに、おとなしく従ったり、他のものがブロックで家をたてるのをじっと見たりするだろう。彼は、家庭にはない新しいおもちゃや教具を、人に分けることはできないかもしれない。しかし指導によっては、他のものと分けあうということも、大した問題にならないですむであろう。

ドナはひとかたまりのドーフ粘土を小さくわって、テーブルのひとりひとりの子どもに、ひとつずつ分け与えている。

W先生が「ドナちゃんはドーフ粘土を分けてあげているのね」という。

ドナが「わたしは分けているのよ」とくりかえす。

ある子どもたちは、分けるのには指導が必要なのだ。ジュリアはもっと多くの皿をほしがり、スウザンからそのいくつかを奪おうとしている。スウザンは彼女が洗っている皿をつかんで離さない。ジュリアは金切声をはりあげる。

W先生は「ジュリアちゃん、スウザンちゃんに、私にもお皿を少しわけてちょうだいと、たのみなさい」という。

ジュリアはいう。

「スウザンちゃん、わたしにも分けてちょうだい」

スウザンは、いく枚かのお皿をわたす。

W先生が「ありがとう」という。

ジュリアも「ありがとう」という。

ある三歳児たちは、内気で、引込み思案で、たとえば、自転車にのる順番がまわってくればと思っているのを、誰かにみてほしいと願っている。

四歳児もまた、彼らが何時でも「ままごと」をしたり、グループの一員であることを、はっきり望んでいるわけではない。家では彼らは自分と同じ年齢の遊び相手を、だれももたないかもしれない。だからこれは実に、大きなグループの一員たることを学ぶ新しい経験である。彼らが兄弟や姉妹をもっていたら、みんなが同じ年齢であるナースリースクールで、リーダーや従者になることは、むずかしいかもしれない。

三歳児が母親から引き離されたときは、どうなるのだろうか。

「お早うございます。わたしは学校にきたのよ」これはナンシーがナースリースクリールの先生にした、あいさつである。いくつかの玩具を熱心にしらべて彼女は、「これ、これ、これ、私はこれがほしいのよ」という。それから母親の方をふりむいて、

「私はいま学校にきているのよ」という。

母親は「今かえってまた五時にお迎えにきてもらいたい？」とたずねる。ナンシーはすぐに承知する。

ナンシーは画架を見ながらいう。「わたしはかきたくないの」と。

教師は母親が帰ってしまって、状況が変わっていることを知って答える。「もし私がかき方を教えたら、あなたは、きっとそれが好きになるわよ」と。

ナンシーは承知し、やがて絵をかくことのおもしろさをおぼえる。なかば歌うようにいう。「わたしは自分でかいた。自分の指で。自分の指で」と。

うれしさいっぱいのナンシーでさえも、「先生があなたにかき方を教えてあげましょう」という援助のことばが必要であったのである。

ナースリースクールのよい日は、理解のある教師によって、子どもたちのひとりひとりに、グループの一員として活動する機会を提供する。

ナースリースクールの教師は、一日の流れの中に、子どもたちにとって新しい経験となるものがたくさんあることに気がつかなければならない。その中には家畜や愛玩動物もふくまれている。

マッシュウは籠の中の白の二十日鼠を見て、じっと考える。

「あ、動物がいるよ。二十日鼠だ。ぼく二十日鼠が大すき。一、二、三って車をまわしてるよ。目をとじてるよ。これは小さな赤ん坊だ。あれは大きな丈夫な親鼠。赤ん坊とお母さん鼠とお父さん鼠」**注意ぶかい観察―科学心の芽ばえ。**

みつばちについての話をきいた後で、アンネは、つぎのように尋ねる。「みつばちの本を借りて、家にもってかえってもいい。お母さんは蜜蜂の話を知らないもの」

音楽や芸術の経験の中に、創造活動がふくまれている。遠足では、いろいろなところへいく。農場にいったり、動物園や、消防署、あるいは飛行場などへ。ある日の遠足では近所を探険する。

この年齢の子どもたちは、衣服のぬぎき、排便、食事などいろいろな方面で自分でやろうと努力する。この場合、他の子どものやるのを見ることが、家で保護されすぎている子には励ましとなるであろう。

子どもにとっての「いい一日」というのは、偶然おこるのだろうか。そうではない。**教師が前もって、学習を助成する環境を、注意ぶかく計画してつくっておくのである。**教師自身が重要である。教師は、子どもたちが何を好むかを知り、かれらの可能性を理解できねばならない。教師は子どもの行動にたいする洞察力を

もち、子どもが好きでなければならない。教師は園の雑務をあまりもってはならないが、しかし園全体のことについてよく知っていなければならない。彼女は個々の子どもの特殊な要求をすばやく見ぬくことが要求される。

園の雰囲気は、すべての子どもが忙しく活動し、熱中しているが、外から統制されてはいない。ひとつの活動からもうひとつの活動へ、しっかりとした計画のもとに急ぐことなくスムーズに流れる。

子どもたちと教師の声が穏やかにひびいている。突発的なできごともうまく受け入れられる。自然について発見したことは、原因と結果について、季節の変化もおりまぜて討論される。

両親はナースリースクールの生活について、しばしば多くの疑問をもっている。どうしてこうするのか、どうしてああするのかなど。教師との非公式な接触、電話での会話、観察、会議、印刷物、掲示板、手紙などが、その説明のためにつかわれる。たとえば、つぎの文は両親への手紙の抜粋である。

「外遊びは本来、砂遊びや泥遊び、水遊び、フィンガーペインティングや絵の具などをさせるものです。それでこれらの活動を活発にさせるために、お子さんたちに古着を着せることをすすめています。どうぞ趣旨にご賛同ください」

春の季節に関するナースリースクールでの活動について、両親に知らせる別の手紙もある。

――春のきざしの観察、それに関する詩や歌、湖へのした見、遠足を計画した理由、などが記されている。

子どもたちも、また、自分の歩みを評価する。最近五歳になった子どもたちのグループは、どんなに彼らが大きくなったかについて話していた。

「ぼくたち、背が高くなったよ」

「ぼくたちはふとったよ」

「わたしたちは、いろんなことができるようになったわ」

サムはいう。

「ぼくたちがはじめてナースリースクールにきたときは、自分の上着をロッカーにおいたんだよ。ぼくはいつも上着を掛けられなかったし、いつもぼくの玩具では、誰にも遊ばせなかったんだよ」

責任と自覚の発達を子ども自身がみとめている。

この年齢の子どもたちにとっての「よい日」というのは、楽しい日であり、広い世界の新しい経験の刺激に満ちている。そこでは子どもたちはたえず「なぜ、なぜ」という疑問をもっており、教師はそれに答えることをせまられているのである。

幼稚園で

サラー・ロー・ハモンド他

幼稚園の一日を「よい日」とするのは何であろうか。ある日の子どもたちの経験についてのいろいろなことがらが思いうかぶ。なるほど幼稚園の子どもは、園の生活を満足するための全ての理由を、多くのことばで発表することは、めったにない。「よい日」というのは、一つだけの大きなすばらしいものもあれば、または多くの小さな幸福感が集まってなっている場合もあるかもしれない。

ピーターは母と車に乗っていた。彼は二十五人の一ばん最後になった。教師は「さようなら」と手をふっていた。車は出発した。と、ギーと止まった。お母さんが呼び返す。「私も幼稚園にいきたいわ」といって。それから教師はフィルがその日彼女をみつめて「ぼくは明日まで待ちきれないんですよ」といっていたのを思い出した。そして非常な満足と喜びに満たされた。彼女は部屋にもどった。子どもの熱心な期待のことばが耳もとで鳴りひびいた。母親のことばが彼女の胸にひびき、また「よい日」にしたいという、フィルの明日のためのよりよい計画の立案が始まった。

しかし、なぜそれが、「よい日」になったのか。何の魅惑が、ジェインが〝幼稚園のおうち〟と呼ぶように、彼らの心をとらえたのであろうか。幼稚園の「よい日」というものについての、子どもたちの感じのなかには、有形無形の多くのいろいろなものがはいっている。

人形コーナーがあった。そこには、カシーが着飾った、ちぢれ毛で、つくろった人形があった。かの女は一日に何回も着物をきせたり、ぬがせたりした。レコードプレーヤーは今もまだあった。しかし教師は、その両側にすわって話に聞き入っている、エレンとハロルドのことを考えた。パットはリズムのリーダーだった。女の子たちがまるく輪になった。腰をかがめたり、手をうったり、「わたしたちは他の子どものためにダンスをしてもいい？」と、息をはずませながら尋ねた。

よい日とするには、適当な場所と材料が必要だし、それが子どもたちに、創造的にかれらの考えを発表することができるようにさせる。

教師は、子どもが魅力的にならべた図書机をながめる。本が園児の心をとらえる。本棚には、あふれるように本があったが、父や母に何ども読んでもらうために家にもち帰って、今は一冊もないように思えるほどである。多くの子がその日はお話の時間によまれたのと同じ本をほしがった。本を読んでしまった時「もう一度よんで」というのを聞くのくらい、うれしいことはない。**今日は本への興味や読書欲が養われたのである。**

つみき、トラック、汽車、粘土、パズル、クレヨンや絵の具がそれぞれの置場においてある。部屋は数分のうちに蜂の巣をつついたようになる。消防夫、おまわりさん、医者、看護婦、パイロット、技師、食料商、大工——最初何かになり、それから他のものに。しかし、それは五歳児には真剣な生活である。ひきだしが開けられる。スカート、襟まき、手帳、ハイヒールの靴をひっぱり出して、もっと本物にみえるように衣裳をつける。

今日はネリーの誕生日である。彼女はケーキ作りの手伝いに、ジョニーとスーをえらんだ。卵をわり、ねり粉をたたくのは、何とおもしろいことだろう。子どもたちが「ハッピー、バースデー」を歌ったとき、ネリーはほんとにうれしそうに見えた。彼女にとって最良の日であった。

温かい友好的なふんいきにつつまれたこの日は、子どもたちに自分たちは安全で、価値が認められ、必要とされていることを感じさせた。彼らはケーキを作りながら多くの学習をした。つまり、**コップ半分、卵二個、四分の一ポンド、**などの**算数の語彙**を学んだ。

さて教師は地球儀をちらっとみた。そしてこの年ごろの子どもの飽くことを知らない好奇心を考えた。彼らは学びたがっている。**彼らは知識を求めている。**彼らは身のまわりのことだけでなく、遠くのことについても、あらゆることについてすべてを知りたがっている。そして次から次に質問する。

五歳児は小さいかもしれない。しかし彼らは大きなことを考えており、大きなことを話すのを好む。ある日ケリーは、部屋に入ると、掲示板を見ていった。「そうだ、ぼくたちいい研究を思いついたよ、ロケットと宇宙の研究をしよう。きっとおもしろいぞ。今年の終りまでそれを研究しよう」と。

彼らは世界について、たくさんのおもしろいことを学んだ。そして探険したり実験したりしたとき、彼らは本当によろこんだ。彼らは自分のことを「科学者」とよんだ。毎日かれらのロッカーには、分けあう品物がいっぱいはいっていた。あたかも純金であるかのように宝物をしっかり抱きしめて誇らしげに歩きまわった。

この話は、グループで語られたことを書きとったものであるが、彼らの学習のもようを表わしている。

「小鳥——私たちはビューティとサムという二羽のいんこをも

っている。それはどちらも青緑色である。ビューティが六個の卵を産んだ。――彼女は最初の卵をこわした。二、三日してもうひとつの卵を産んだ。それからさらに四個を産んだ。四個の卵はかえった。最後の卵はかえらなかった。最後の卵は紙のように軽かった。

ここに、卵についてのおもしろいことがわかった。彼らは午後産んで、朝かえす。卵がかえるには十八日間かかるのだ」

幼稚園のよい日には、知的な刺激が与えられる。問題を尋ねたり、答を発見したりする機会、新しい言葉を学び、それを使う機会、それは多くの領域についての勉強の手初めである。**子どもたちは――仕事に集中し、じょうずに材料を使うように注意するなど――よい仕事の習慣を学ぶ。**

いく日かの忘れられない日があった。自分たちが学校で朝食を料理した日、それから愛玩動物のショーをし、他の子どもをそれに招待した日など。あの日はキムとライズにとって一ばん楽しかった日で、「早く早くバターになれ」と一緒に歌いながらかきまぜたものだった。

一ばんはしゃいだのは、道化師が出てきて、彼の顔にメーキャップをしたときだ。全部の子どもが笑った。そして道化師が普通の人であることを知ったのは大収穫であった。

子どもたちは皆、酪農場に大きなバスに乗って行った日のことをおぼえているだろう。春のある時、牧羊場に連れられて、羊がやがてくる暑い夏を快く過ごすために、毛をつまれていたのを見た。**人間的、自然的環境の中のほんものの経験が大切である。**

しかし、他の日は正規の日々である。子どもたちは、毎日の日課――手を洗ったり、便所にいったり、ひるねをしたり、遊んだり、しごとをしたりして共に生活すること――に忙しい。毎日そこには問題がある。しかしこういう問題を解決しながら、子どもたちはよりよく生きるための幸福感を得ていくようだ。

恐ろしがりで、はにかみ屋であったアリスは、もう今では自分自身と自分の能力を発見して、得意で胸をはるようになった。ボスで強情ものであったエドワードは、今ではすっかり変わって、他のものを傷つけずに遊べるようになった。**子どもたちは、話を聞くことや、指図に従うことや、じょうずに選ぶことや、自分で自分の仕事をすることを学んだ。**これらは「よい日」であった。というのは子どもたちがその計画に参与したから。そして**自由と責任との関係を体験したのだから。**

教師は時計をみた。顔にほほえみが浮かんでいる。この小さな活動的な生きものつまり、子どもたちは、彼女の心をとらえているし、彼女にはそれがわかっている。**教師は計画し、研究し、仕事をせねばならぬ。**またすぐやってくるフィルの明日のために。

（西南女学院短期大学・市丸成人訳）

読み方の早期教育に関するさまざまな見解

ニラ・バントン・スミス

ニラ・バントン・スミス（Nila Banton Smith）は、グラスボーロ州立大学の著名な教授であり、読み方の早期教育に関する諸見解、特にそこによせられるような圧力や問題提起について論じ、研究的な見解を支持している。これは、アンアーバーのミシガン大学で行なわれたミシガン教育協議会における講演の要約である。

◆事実と究想

スプートニクの上昇は、アメリカをかつてないほどに驚かせ動揺させた。アメリカ合衆国の優越性が、いまや他の国の技術的な成功によっておびやかされたのであり、そして、その国は、明らかに世界を共産化しようと志しているのである。私どもは、アメリカ人としてアメリカ人の生活を守ろうとするならば、今までよりもより一層の努力が必要である、という事実に、突然そして鋭く、目覚めさせられたのであった。

教育は、そのあらゆる分野で、全身をあげてこの問題を感じとった。ウイリアム・カー（William Carr＝国立教育協議会、行政長官）は「最初のスプートニクの次にきたものは、教育に対する驚異的な社会的要望であった」といっている。この、教育全般に対する要望の一部として、いまや読み方の教育がこれまでにない重要性をもって論じられる問題となっている。読み方に関係のあるあらゆる面とあらゆる水準において、より多くの成果をあげようとするための圧力が、ただちに感じられはじめた。

しかしながら、読み方の教育に関連のある面でのこの圧力は、幼児に読むことを教えようとする動きの中に、一番はっきりと現

われているように思われる。ある幼稚園では、先生方が、両親からの圧力や、あるいは管理者からの圧力で、その管理者たちは地域の教育委員会や地域社会の意見に次第に影響されてしまったのであるが、それらの圧力を受けた結果、いまや正式に読み方を教えはじめているのである。両親たちは自分の子どもたちに、むりやりに読み方を教えようとするし、近刊書は、両親たちにどうしたら赤ちゃんに読み方を教えることができるかを説いている。例えば次のようである。「二歳が教えはじめるのに一番ふさわしい時である。しかし、もしもあなた方が、いささかの困難に耐える決意があるなら一八か月からはじめることができ、また、非常に早くから教えはじめることができるくらいに賢かったとしたら、一〇か月でもよいのである」

何とまあ、幼児たちに読み方を教えようとして、人々は一体どこまで飛躍しようというのだろう。多分、次に現われる新機軸は、生まれる前に、母親に丸薬を与えておいて、その子どもが生まれながらに読むことができるようにするということであろう。この前の春の教育協議会で講演を行なっている間に、この空想的な可能性が思い起こされたのであった。その時、私は、こんなことは非常に馬鹿げた極みであると考えたが、間もなく、もっと奇妙な実験報告を読むことになった。それは、エドワード・R・シペイ（Edward R. Sipay）によって書かれたもので「読み方学習に関する胎生期教育の効果」と題されていた。[11]

その研究は、一二年間にわたってなされた。シペイは、四か月の胎児をもった母親たち一一二名について研究を進めた。その母親たちは三つの均等なグループに分けられた。そして、一つのグループは自分たちの胎児に基礎的なリーダーを教えた。一つのグループは、ただ発音の指導だけを行ない、もう一つのグループは、無意味綴りを繰り返すよう要請された。そのレッスンは、テープにふきこまれていて、母親の腹部にとりつけられた特別装置の器械によって、胎児に伝えられた。その子どもたちが六歳になって一年生にはいった時、読み方テストが行なわれ一年から六年まで毎年それが続けられた。胎児期に読み方の教育を受けた子どもたちは、それを受けなかった者よりも、テストでよい成績をあげた。この論文の著者は、次のような意味のことばを引用して結論としている。すなわち「読んだものを、何でも、余りにも気早に信じすぎるな」

シペイ博士は、このようにどんどん高まっていく幼児に読み方を教えようとする傾向が、いかに馬鹿げたものであるかを示そうとして、にせの研究報告をもくろんだのであった。

冗談はもうたくさんだ。さて、今度はまじめに、この問題について、異なった幾つかの面を吟味してみよう。

◆さまざまな思いちがい

幼児に正式に読み方を指導せよと、唱える人々は、明らかに読むという行為の性質について、幾分思いちがいをしている。たとえば、その人々は、読む力の成長は他の全体的な成長とは別であるもののように考え、更に、おとなが子どもに読むことを教えようと決定しさえすれば、いつでもその時にとり出して、左右することのできる独立の学習要素のように考えているらしい。

実際、その領域の科学的な研究をよく知っている人々は、読み方は、子どもの全体的な成長の中にあって、分かちがたい一部分であるということを認めている。多くの研究が、読む力の成熟は、身体的な成長、心的な成長、情緒的・社会的な成熟、および経験的な背景と言語の発達に伴うものだ、ということを明らかにしている。これらの統計的な資料に照らして、幼児教育の専門家たちは次のように問うのである。すなわち「私たちは、なぜ、他のもっと基本的なさまざまな面の成長に先んじて、むりに読む力を成長させようとするのだろうか？」と。

今一つの誤った考え方として、読み方の過程を余りにも単純な概念でとらえようとするものがある。ある人々は、一人の子どもが、紙に印刷された一つのことばを声を出していえると、もうその子どもが文字を読んでいるのだと思ってしまうようである。最も普通に用いられる方法は、子どもにアルファベットを覚えさせたり、単語の書いてあるカードをひらつかせてみせたりすることである。また、子どもに発音を教えたり、音声学的にことばを分析して、そのことばを子どもに発音しやすくしてやったりもする。

ある日のこと、一人の非常に知的で、感受性も鋭い若い父親が、私に次のようなことを語った。「私の四歳になる息子は、テレビの二つのことばがわかっている。しかし、私たちは、その子が読めるということはできない。テレビに出てくることばを一つや二ついえることが、読めるということではないから」その父親は、何と正しいことであろうか。そして、他の若い父母たちが、単にことばを声に出していえるのが、読むという行為ではない、ということに気づかないのは、何と気の毒なことであろう。

それから、読み方の不可欠の条件である意味の獲得ということがある。私のよく知っているものでは、幼児に読むことを教えようとする報告の中で、子どもに読んでいるものの意味を考えさせるように教育することに、注目して論じているものはないのである。一方、新[13]しい多くの研究が、三歳の幼児たちは起きている間中、そのほとんどの時間を思考していること、そして、私たちの多くが推測しているよりもずっと高度な知的な過程によって考えるということを、指摘している。幼児たちは、思考能力を持っているのだから、おとなの判断だけで、単なることばの記憶という

ような、きまりきった訓練のために、子どもたちの時間を費やしてよいだろうか？

更に今一つの思いちがいは、個人差の無視である。ある人々は、たとえば、二歳児はすべて読み方学習に耐え得る、とか、あるいは四歳児、あるいは幼稚園児は、全員読むことを学び得るとか、そんなようなことを想像する。ある子どもは、確かにそれができるだろう。しかし、ある子どもは、できないのである。

早い時期から文字を読むことができるようになる子どもたちについて研究[8]した人々には、こういう子どもたちの特性について、かなり一致した見解を示している。これらの特性として私どもは、次のようなものを見出すことができる。すなわち、

……このように早くから読めるようになる子どもたちは、知的にすぐれていて、父親は聖職であったり、専門的な地位にいる者が多く、読むことに関係のある活動を刺激されたり、奨励されたりする機会の多い家庭で生活している……

不幸なことには、アメリカの子どもたちの大部分が、これらの特性をもっているのではない。そこには著しい個人差があるのであって、就学前の幼児全体に読み方の学習を行なおうという人々は、この非常に重要な点を考え忘れているのである。

◆早くから読み方を教えておくと、長じて後により高度な成果をあげさせ得るであろうか？

幼児に読み方を教えようとする人々の、主な論点は次のようである。すなわち、早くから読み方に熟練させておくならば、その子どもたちが学校にはいってからの学業に幸いするであろう、ということなのである。この論議は、果たして、どのくらいの合理性をもっているであろうか？

正式の読み方の教育が、すべての子どもにとって学校で開始されているということの結果を、ちょっとふり返ってみよう。最初に、歴史は私どもに、一つの物語を告げてくれる。一八〇〇年代の中頃から今世紀の四半分に至るまで、子どもたちは六歳で小学校に入学させられ、入学した最初の日から正式な読み方教育がはじめられていた。

しかしながら、一九一五年から一九三五年の間に、おびただしい量の教育研究の文献[1][5][9][14]が、最初の学年における落伍者の極めて多いことを指摘した。研究者たちは、一年生の二〇パーセントから四〇パーセントの子どもが落伍しているということを見出した。このような落伍の原因は、読む力の欠如であった。これらの重要な統計の結果として、読み方のレディネスという概念が紹介された。そして、先生方には、ある種の子どもたちに対して正式の読み方を教えるのを延期するように、助言が与えられた。その子どもたちは、この読み方という複雑な技能をじょうずにこなせるだ

けの準備が整うまで、延期させられるのである。

六歳で一年生に入学して、正式に読み方を教わった子どもたちの中に、そんなにも多くの落伍者がいるとしたら、五歳児や、もっと小さい幼稚園児たちに、正式に読み方を教えるとしたら、一体どんなことが起こるだろうか？

もっと新しい研究は、その上に、読み方の早期教育について、その効果が持続するか否かという点に関して、みのり多いものをもっている。これらの幾つかを手短に述べてみよう。

⑥ケイスター（Keister）は、五歳児は、正常な程度に一年生をやりとおせるだけの、十分な読み方の技能を身につけることができる、といっている。しかし、こんなにも発達した技能が永久性を欠いていて、一年と二年の間の夏に、消失してしまう傾向があるということを見出している。

⑦ミシガンのグルースポイントにおいて、心理学者たちは、幼稚園生活に十分に耐えられるまでに成熟した子どもたちを選び出し、五歳にならないうちに入園させた。一四年後に、こうして早期入園を許可された子どもたちの中でまだ学校教育を受けている者について、その学業成績が研究された。その結果、次のようなことがらが見出された。すなわち、これらの子どもたち、つまり十分に成熟していて早期入園が可能であったために、早期入園者として選び出された子どもたちのうち、約1/4（二五・三パーセント）が平均よりも下位であったり、同じ学年をくり返したりしていた。

⑩ロッチェ（Roche）の研究は、次のような結果を証明する。すなわち、読み方に対してまだ準備のできていない子どもたちは、正式に読み方の教育を受けるための準備ができあがるまでは、レディネスの段階においた方が、より多くの成果をあげることができる、というのである。そして、子どもたちにとってそのような役目を果たす一定期間、つまりレディネスの期間を与えて後に、はじめて正式に読み方学習をはじめさせるならば、長じて後の学業の進歩を遅退させることはないであろう。

幾つかの新しい研究は、特別に早く一年に入学したり、あるいは特におくれてはいった子どもたちについて、三、四、五、六の各学年での成績を比較している。普通は、一年生で正式の読み方の教育がはじめられる。そこで、一年生を早くスタートした子どもたち、あるいはおそくスタートした子どもたちの、高学年での学業の結果を知ることは、この論争にとって極めて当を得たものである。

②キャロル（Carroll）は、一年生を早くスタートした者とおそくスタートした者の、三年生になった時の読み方の成績を比較した。③ハリウェル（Halliwell）とステイン（Stein）は、四年と五年の子どもたちについて同じ研究をし、④ハムプルマン（Hampleman）

は、六年になった子どもたちについて、同じ性質の研究をした。これらの研究者たちはすべて、早く入学した者はおそく入学した者よりも、成績が悪い、という有意性をもった結論を導き出している。

このように、有用な研究の多くが、子どもたちに早くから読み方教育をはじめたからといって、学業のプラスにはならない、ということを示しているのである。

◆貨幣を裏返して

さあ、今度は貨幣を裏返してみよう。つまり、逆の場合をも考えてみよう。今までのところ、私は、幼児の群について論じ、おとなのイニシァティブによって行なわれる指導を受けさせられる子どもたちのことを論じてきた。しかし、自分から読み方を学ぼうとする幼児たちも存在するのである。これは、私が、これまで論じてきたものとは、全く異なった事態である。

ターマン（Terman）[12]は天才児を研究して、これらの天才児の多くが、非常に早くから読めるようになる、ということを発見した。あなた方は、その天才児たちはほとんどが、ただちょっとした付随的な助力をおとなから受けるだけであって、全く自分自身の要求で読めるようになったということを、思い出すであろう。ある子どもは、両親が全然気づかない間に、読むことができるようになっていて、突然のように読んでみせて親たちを驚かせたりするのである。

個人的な経験の引用であるが、私は、キャシィという若い友人の娘のことを話してみよう。

キャシィが三歳の時、私はよく他の客と一緒に彼女の家で夜を過ごした。客が到着すると、キャシィは半ダースほどの本をかかえて電灯の下にひとりですわりこみ、客のおしゃべりなどすっかり忘れて、長い時間、自分の本を、文字通りむさぼるようにみていた。

四歳になった時、キャシィは幾つかのことばについて、これは何かとたずねはじめた。そして、今度は、そばにすわりこんで声を上げて本を読んで聞かせるようになった。ほとんどは記憶に頼ってであるが、あちこちのある単語は、識別することができた。四歳半の時、ある日のこと、母親が彼女を十円ストアーに連れていった。その時、彼女は絵入りの小さいパンフレットをみつけて、それを買ってくれと頼んだ。その絵には、各々にひとつずつ単語が書かれていたのである。この本を用いて、キャシィは読み方を自分で勉強しはじめた。そして、この前の秋、五歳で幼稚園にはいった時には、もうすらすらと読めるようになっていた。

キャシィがこんなにまで熟練しているのを、幼稚園の先生が

気づいているかどうか知りたいと思って、私は「先生はあなたに読ませてくれますか？」とたずねてみた。キャシイは「ええ、毎日私は先生に読んで聞かせてあげています。時には、他の子どもたちにも読んであげます」と答えた。そこで私は、幼稚園の先生が子どもたち全部に、実際に読み方を教えているのならばそれを知りたいと思って、もう一度たずねてみた。「先生は、みんなの子どもに、毎日読ませなさるのですか？」「いいえ、私ともう一人の女の子だけよ。でも私はその子より、ずっとよく読めますけど」とキャシイは答えた。

キャシイは、単に読む力が進んでいただけでなく、評価のしかたまで身につけていて、それを用いて読み方の能力を評価していたのであった。しかも、全く無邪気に無遠慮に、それを用いていたのであった。

私が、この実例を用いて指摘しようとしたのは、次のようなことである。(1)キャシイは、自分自身で疑問を抱いたり、要求が起こったりした結果、読むことを学びはじめた。そして、その疑問や要求が優しくよく気のつく母親によって、こたえられ受け入れられたのであった。彼女は、誰か大人が彼女に読み方を教えようと決めたために、読めるようになったのでもなく、彼女に記憶するようにと単語カードをひらつかせた人もなく、また、bは“buh”cは“cuh”などと発音練習をさせたためでもなかった。彼女は、実際のところ、自分ひとりで全部の単語を読むことを学んだのであり、それらの単語は、絵にかかれていたために彼女にとって意味深く思われたのであった。(2)キャシイは、幼稚園においても、拒否されずに文字を読むという経験をさせて貰えた。そして、そのようなことは一年生になるまで待つべきだ、ともいわれなかった。幼稚園の先生は、キャシイの読み方に対する興味と能力を助長してくれた。しかし、先生は決して、キャシイにも他の園児たちにも、その園児たちは、まだ読みはじめるだけの成熟度に達していなかったのであるが、それらの子どもたちにも正式に読むことを教えはしなかった。

今日、幼児たちの多くが、早熟になっている。幾つかの研究が、五〇名に一人の割合で、幼稚園にはいってくる子どもが文字を読めるようになっている、ということを示している。これらの子どもたちには、求めた時にはいつでも助力が得られ、読みたいと思った時にはしばしば耳を傾けて貰えた、ということが認められるであろう。アメリカは、天才たちの貢献を待ちこがれているのだから、準備のできあがった子どもたちを無視したり、読み方の技能を身につけようとして重要な助けを求めている子どもたちを見落としたりは、決してしないのである。

私は、幼稚園の先生方の多くが、現在、読み方の成長に関係の

ある領域で行なっていることよりも、それは正式な読み方の教育ではなく、形にはまらない機能的な意味での読み方教育であるが、もっとたくさんのことができるはずだと思っている。幼稚園時代全体にわたり、一年生にはいるまでに何らかの準備を必要としているこの期間を通じて、先生は、折にふれては、子どもたちに自分たちの使っていることばが、シンボルとして印づけられるということを見せるべきであろう。それは、先生が黒板や掲示板に文字を書きつけていく時に起こる経験である。子どもたちが見つめている中で、クラスルームの経験や興味や要求などから生じてくる注意とか計画、指示などを書きつけていく時、そのあらゆる機会から利益が得られるはずである。子どもたちがまだ単語やフレーズや文章を読むように要求されない間に、彼らは次のような価値の高い経験をすることになるであろう。つまり、意味が、読むことのできるシンボルに置きかえられるのを見る、という極めて価値ある経験をするのである。

もしも、ある子どもが、幾つかの単語を選び出して、それを自分の意志で読もうとしはじめたならば、その子どもは、その特権を拒否されることなく、賞められ奨励されねばならない。その現われを全然みせない者に関しては、先生は、現われたものだけで満足すべきである。究極的には、幼稚園かあるいはもっと後の一年生かで、その子どもたちの読む力が成熟してくるにつれて、やりはじめるにちがいないのである。

……

私は、平均あるいはそれ以下の知的水準の子どもたちに読み方を教えることは、それを圧迫することになると論じ、すぐれた能力の子どもたちはそれなりに認めてやることが必要であると、論じている。すぐれた子どもとは、幼稚園にはいってくる時、すでに読むことができるようになっている子どものことである。

チャールス五世がその晩年に、次のようなことを発見して以来、四世紀が流れている。すなわち、彼は自分の時計のコレクションが、決して同じ時をきちんと指し示すことができない、という事実に気づいたのであった。今日、多くのしろうとたちや、幾人かの著作家や、そして幾人かの先生方さえもが、幼児に読み方を教えることについてさまざまに論争している。それは、あたかも、子どもたちが自動機械であって、私どもがねじを巻こうとか、動かしはじめようとか思いさえすればいつでも、それにこたえて、チクタクと動き出すもののようにみなして、論じているように思われる。

私どもが、個人差を尊重することを学ぶのは、一体いつなのであろうか？　一定の年齢で、子どもたち全員に何かを教えようという集団活動は、いかに現代の教育哲学、心理学、あるいは教育

研究の成果に反していることだろう。何人かの恵まれた環境にある頭のいい子どもは、非常に早い時期から読みたがって騒ぐかもしれない。もしそうだったら、その子どもたちには、彼らの求める助力を与えてはならないという理由がない。そして、他の子どもたち、つまり読み方に対してはっきりした興味をまだ示しはじめない子どもたちは、七歳になるまで読む力が成熟しないのである。現在、私どもは、次のような事実を証明してくれるたくさんの証拠をもっている。すなわち、有機体の準備が整わないうちに、その子どもたちにむりに読み方を教えてみても、長い将来においては決して利益ではないということ、そしてむしろ有害な結果を招きやすいということなのである。

文　献

① H. L. Caswell, "Non-Promotion in the Elementary School," *Elementary School Journal, I*(October 1933), 644–47.

② Marian Carroll, "Academic Achievement and Adjustment of Underage and Overage Third-Graders," *The Journal of Educational Research* (February 1964), 290.

③ Joseph W. Halliwell, and Belle W. Stein, "Achievement of Early and Late School Starters," *Elementary English* (October 1964), 631–39.

④ Richard S. Hampleman, "A Study of the Reading Achievements of Early and Late School Starters," *Elementary English* (May 1959), 331–34.

⑤ A. O. Heck, *Admission of Pupil Personnel* (Boston: Ginn & Co.).

⑥ B.U. Keister, "Reading Skills Acquired by Five-Year-Old Children," *Elementary School Journal,* XLI (April 1941), 587–96.

⑦ Paul E. Mawhinney, "We Gave Up on Early Entrance," *Michigan Education Journal* (May 1964), 25.

⑧ Gus P. Plessas and Clifton R. Oakes, "Pre-Reading Experience of Selected Early Readers," *The Reading Teacher* (January 1964), 245. Reprinted with permission of authors and International Reading Association.

⑨ Mary Maud Reed, *An Investigation of Practice for the Admission of Children and the Promotion of Children from First Grade,* Doctoral Dissertation (New York: Teachers College, Columbia University, 1927).

⑩ Helen Roche, "Junior Primary in the Van Dyke Level Plan," *Journal of Educational Research,* LV (February 1962), 232–33.

⑪ Edward R. Sipay, "The Effect of Prenatal Instruction on Reading Achievement," *Elementary English,* Vol. XXXXII (April 1965), 431–32.

⑫ Lewis M. Terman, *Genetic Studies of Genius* (Stanford, Calif.: Stanford University Press). Vol. I (1925), 271–72; Vol. II (1926), 247-55.

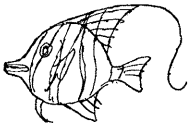
⑬ Kenneth Wann, from reports of research conducted by Kenneth Wann and associates (New York: Teachers College, Columbia University).

⑭ W. W. Wright, "Reading Readiness: A Prognostic Study" *Indiana University Bulletin,* XII (Bloomington, Ind.: Indiana University, 1936).

（十文字学園短期大学・本田和子訳）

幼児の権利は侵されている

ロバート・J・フィッシャー



イプシランティのイースト・ミシガン大学教育学教授、ロバート・J・フィッシャーは、過剰定員や、二部授業（かけもち）や、学力達成に方向づけられたお勉強主義の課程にはげしく憤慨している幼稚園の教師たちを支持している。幼稚園の教師や児童発達の分野の教授や研究者たち、また幼児の権利を守るために親自身の自己満足的な学力主義をよろこんで捨てようとする両親たちからなる、新しい推進グループを形成すべきではないか。（「行動の計画」一九六四～六七、子供の教育一九六四年十一月号一三九頁参照）

われわれの学力主義にとりつかれた文化は、児童中心の課程の、最後のとりでを侵しているのだろうか？　幼稚園までもが、学校主義的な優越性の圧力の前に、屈服しようとしているのだろうか。

さきごろ、教員の研修会で、一人のベテランの校長が、大講堂にあふれる幼稚園と小学校一年の教師たちに挨拶した。

彼は、学校の管理経営上、多くの問題にあれこれとなやまされてとくにたえ難い日や、とりわけて挫折感にくずれ折れる夕べを、忍耐してのりこえねばならないとき、必ず翌朝、幼稚園でしばらくの時をすごすことにしていると述べた。彼は幼児のバイタリティー、自発性、すがすがしいユーモアにふれると、気持ちの新鮮さをとり直して、教育の戦場にもどることができると感じるのである。

型にはまらない学習のためのとりで

幼稚園は、子どもというものは、型にはまらないやり方で学ぶものだと思っている教師にとって最後のとりでとなってしまっ

た。そういう教師たちの幾人かは、あまりにも多くの初年級の教室を特徴づけている。お勉強偏重からにげ出してしまった。少なくとも、幼稚園では、教師は、ゆっくりしか発達しない子どもの、ゆっくりした発達にも、きらくにかまえていられるのである。

最近に至るまで、幼稚園の子どもたちに、一連の、最低限の学業的要目（ミニマム・エセンシャル）を強制するようなことはなかった。従って、教師たちに、〝子どもたちをしめ上げて〟子どもたちに形式的なレディネスの単調な作業を強いるような、あまり大きな圧力はかかっていなかった。熟達した幼稚園の教師は、生きることと成長すること、という大切な仕事に従事し、子どもたちを導き、一年をすごした、と感じることができたものだ。子どもたちは仕事をする時間があり、遊ぶ時間があった。食べる時間、休憩したり、うたったり、踊ったり、あらゆる魅惑的な小道を探険したりする時間があった。

お互いに影響しあうことを学ぶ時間—計画したり、試したり、自然な好奇心を育てたりする時間があった。新発見の大きなよろこびを楽しむ機会があったし、ついこのごろ身につけた腕前や実力を試してみるスリルも味わった。また、新しい追求目標に到達する機会もあった。要するに、幼稚園は、教師と子どもとが遠慮なくいっしょになって仕事したり遊んだりしながら、その間に教師は幼児期の発達課題を次第に助成していく、そのような場所だったのである。

幼稚園で保育するすべての教師が、その責務をこのように解釈しているわけではない。中には、強制されることなしに学ぶという自由のとりでを求めたことのない教師もいる。幼稚園の主な目的は、〝子どもをおとなしくしずめておくこと〟だと思っている教師——子どもたちを、自分の席にすわって注意深くしているようにしつけ、将来学校に順応するための適当なお作法、お行儀を教えこむことが、主要なつとめだと心得えている教師もいる。あるいはまた、形式的なワーク・ブックに一生懸命しがみついて、学校のお勉強の準備ができている状態にすることが、幼稚園の教育課程の目標であると考えている教師もある。ある人々は幼稚園のあり方の基本的原理を理解せず、受け入れようとしない。またある人々は、大へん強制的で、すすんで昔のお勉強病の症候群を採用してしまっている。

なぜそんなに急ぐのか？

近年、お勉強主義の圧力は、年齢的段階を下に向かって追いこんでいる。我々は、もっともっとつめこむこと、そして形式的にかっこいい発達をより早くから導入することに関する、あらゆる

論拠を聞かされてきた。これらの論拠がある程度意味をもっていることは疑えない。幾人かの子どもは、我々がかつて考えたところよりは早くから、読む用意が整っている。人や場所や事物にたくさんに接した生活経験のおかげで、子どもは、彼らをとりまく世界に関する知識を、以前よりはずっと多く身につけて学校へやってくる。

若干のアメリカの子どもたち――特に中流階級の子どもたち――は、就学に先だって、すでに、形式化された教育を吸収することができるのにはちがいない。注しかもなお、基本的な問題は、「我々はなぜ急ぐのか？」である。

しかし早期からのお勉強主義の圧力に抵抗を試みているベテランの幼稚園の教師たちがまだ多勢いるのだから、我々は全く希望を捨てる必要はない。これらの教師たちは、発達に必要なものに干渉する圧力に抗議することのできない、未熟で不幸な子どもたちに、著しい関心をよせている。

注・若干の子ども、恐らくは幼稚園にはいる五〇人のうちのひとりくらいは、すでに読むことをはじめているのにちがいない。しかし、このひとりにできるということが、他の四九人の子どもにとっての、よい学習経験を、変更させるほどの効果としてとりあげられるか否かは、大いに疑わしい。（ウィリアム・D・シェルドン、「幼稚園で読書??」――ワシントンD.C国際幼年教育協会一九六二、十四頁）

誰が圧力に抵抗している教師たちを支持するか？

憂慮すべき問題は、多くの幼稚園の教師が勇気を失わせられているという事実である。

誰が、これらの教師たち、またその教え子たちのための弁護をするのだろうか？

彼らは、両親のゆきすぎた関心の流行や、ポピュラーな雑誌の、早くからの読書に関する記事や、幼児におけるあらゆる早教育の可能性を〝証明〟する研究課題に関する出版物、そして、仕事の上での同僚のがっかりさせるような理解のなさをあいてにして、いかに戦えばよいのか？

若干のすぐれた幼稚園の教師たちは、文字通り身をすりへらしている。こんなに多くの子どもをもっていたら家庭と学校の協力のためには必須である。両親との連繋を保つための時間さえ、十分に持つことはできないであろう。

最も勇気を失わせるものは、あまりにも多くの教師たちが遭遇する、孤立することである。幼稚園の教師たちが集まったとき、常に彼らは、かけもち（二部授業）や、つめこみ教室や、最近の

当局の規定や、彼らに対する最も新しいおしつけられた要望事項一式の、覚え書を見せあう。彼らは圧力はよく感じとるが、それに抵抗しようとする彼らの意図は、ほとんど支持されないのである。

もちろん、幼い子どもたちは、あまりにも多すぎる圧力に対しては、彼ら自身で抵抗する。しかし、そのような抵抗は、しばしば不適応の徴候となってあらわれるのである。そしてそのように強いられた教師たちのフラストレーションはいっそう高まっていく。

もし、このような学力主義に対する怒りを発展させるなら、なぜ新しい圧力団体（推進グループ）をつくらないのか？ それは幼稚園の教師や、児童発達の分野の教授や研究者たち、そして親自身の自己満足の野望を、子どもへの愛のためによろこんで放棄しようとする数少ない両親たちによって構成されることが可能である。そのグループのはたらきは、早くから学校的な学習をするような、多くの文化的要請を鈍らせることによって、子どもが、子どもにふさわしい活動をする権利を守るために、ささげられるであろう。

（西南学院大学短期大学部・高橋さやか訳）

訂正　本誌八月号表紙裏の「保育学年報」広告中「第17回福岡大会……」は第19回の誤りでしたので、ここに訂正しお詫びいたします。

倉橋惣三選集第四巻　定価700円　フレーベル館発行

内容目次

☆保育案
☆短言……・子どものための人形
・窓　・この秋　他
☆戦中小篇……・保姆諸君と語る
(1)健康　(2)服装　(3)熱意
・おもちゃ大学　他
☆戦後小篇……・小問答「とんでもない」
・保育の味　他
☆論説……・彼らもまた美を求む
・幼稚園の新使命　他
☆実際篇……・系統的保育案解説
・幼稚園でしていること　他
☆初期の著作……・新しき心　他
☆作詞・書簡・揮毫
☆あとがき

アメリカインディアンの幼稚園

エルマ・クラーク

エルマ・クラークは、米国ユタ州の、インディアン保護地区の一つ、フォート・ダチュスネーに開かれた幼稚園の主事、この報告は新しい試みの成功の記録と、将来への展望である。

ユタ州のフォート・ダチュスネーではじめられた、インディアンの幼稚園、これほど、私が最近分担した仕事の中で、すばらしいものはなかった。なぜかといえば、この幼稚園が、開拓的な新しい企画であったばかりでなく、全くインディアン自身の力で実現したからである。（従来、こうした教育事業は、ほとんど全部が政府の手で開始され、また運営されてきた）

私たちが一緒に働いたのは十八か月に過ぎない。が、私は、こうした恵まれない子どもたちのために働く保育者すべてに、ここの子どもたちの目ざましい教育効果を見せたいと思ったほどである。

子どもたちの言語面の発達度は一驚に値し、また、大小の筋力の進歩もすばらしい。しかし、一番注目すべきだと思うのは、注意集中力の増進である。現在では、多くの子どもたちが二十分ないし三十分の間、画をかいている姿を見るのは珍しくない。しかし、この同じ子どもたちが、最初の頃は、一分間でもじっとしていることができなかったのである。

こうして、おそらく、もっとも大きな変化は子どもたちの態度に見られるであろう。私たちが一番力を入れたことは、子どもた

ちが先ず自信をもち、のびのびと自由に成長するよろこびを感じるように、動機づけ、助けてやることであった。私たちは、その目的のために、適切な、ゆたかな環境を与えるように努力したのである。

園児ひとりひとりの大きな写真が、各自のロッカーに貼られたが、これは、予想以上の効果をもたらした。子どもたちは、日に何度も、自分のロッカーの所に行って、名前を呼びながら、自分や友だちの写真を指さしていた。このことは、彼らに、自他を識別する力を養う機会を与えた。また、ちょっと、助けてやると、子どもたちは、持ち物を、自分のロッカーにしまう習慣を、すぐ身につけることができた。

製作室でも同様で、子どもたちは、使ったパズルやゲームを元の場所に片づけ、自分の行動に責任をもつことを学んだ。この小さいインディアンの子どもたちが、ほんのすこし、おとなが助けてやっただけで、物をきちんと始末することが好きになるというのは、おどろくべきことである。こうして、私たちは、子どもが、自分の生活と学習を心から愛することができるような雰囲気を提供してやれるのだと信じている。我々はまた、三つのL—すなわち、(Living) 生きること、(Learning) 学ぶこと、(Loving) 愛すること—を、子どもに教えることができるのである。そして、この、三つのLを教えることは、三つのR—すなわち、読み、書き、算—を教える時がくるまでの準備であり、こうして、子どもたちは徐々に成長していくのである。

設備と教材について

インディアン部落が、中古の中学校の校舎を、幼稚園のために払い下げたのは、昨年の秋だった。それは、体操室と、四つの教室であった。体操室には、小さな赤い車や、ローラーの上を押して動かせるボート、大小の箱積木、三輪車、ワゴン、それから、大筋肉の発達を促し、ごっこ遊びによい消防手の道具があった。また、大きな飛行機のタイヤがひとつあり、子どもたちを大よろこびさせた。

一室は、ままごと遊びの部屋になり、子どもサイズの諸道具が用意された。他の一室は製作室で、画をかくためのイーズルや、玉さし盤、粘土、ゲームなどがおかれたし、また、とかげ、ハムスター（こま鼠の一種）、オーム、カメ、ヒヨコなども飼ってある。特にこれらの小動物は、貴重な宝物だった。どんなに、無口な子どもでも、こういう小さな生きものには、反応を見せてくれた。だんだん口をきくようになり、過剰な自意識をなくして、社交的にさえなってくるのだった。

もうひとつの部屋は、リズム活動や、お話のために使われた。種々のリズム楽器—太鼓、カスタネット、マラカス、リズムベル、タンブリンなどが用意された。その内のいくつかは手製のものである。また、リズムやダンスの時に使うスカーフは、子どもの親

や、友人たちから寄付していただいた。この色とりどりのスカーフを、リズム楽器と一緒に、子どもに自由に使わせると、皆、思うように、身体を動かし、自分自身を発見し、表現する楽しさを味わうのに、大いに役立った。

保育内容

幼稚園の目新しさにひかれて、子どもたちの母、祖母、姉、伯母たちまでも来園してくる。

とうとう、私たちは、このおとなたちのための裁縫と料理のクラスを、子どもの保育時間中に開いてもらうよう、家庭局に依頼することになってしまったのである。最初の私たちの希望は、「両親協力幼稚園」—母親が交替で週一回ずつ助手をするやり方—にしたいということだったが、この方法は、ここでは、まだ無理であることがすぐわかった。というのはこの母親たちはたいてい、子だくさんで、その上、いろいろの問題をもっている者が多かったからである。開園第一日目、十七名の母親が十七名の子どもと一緒にやってきて、二日目、三日目とつづけて来園した。

こうしてやっている内に、保育内容も、母親教室も充実してきたが、それは、クリスマス以後までで、その頃になると、物珍しさがなくなり、母親は、幼稚園にこなくなった。しかし、この事業が、本当に発展したのは、その頃からである。内外の政治的な分裂や紛争にもかかわらず、この事業は、だんだん強力になっていった。折しも、有力な支持者、推進者であった人が、近くの大学教授として転出してしまったのは、実に大きな損失であった。彼は、他の人より五十年も前から、インディアンの幼児教育に幻を抱いて努力してきた人、そして、それにふさわしい教養を備えた人であったから。その時、ほとんどすべての教育活動—学校教育も社会教育も—が著しく後退してしまったが、幼稚園だけは例外であった。幼稚園教育が、どんなに、子どもたちによいかを知った親たちが皆、熱心に支持したからである。

被災と復旧

このかなり大きな後退期間の後、私たちはようやく自力でやろうとしはじめていた。先ず、クリスマスには、家庭訪問をした。

ところが、まるで、この日が前から決まっていたかのように、元日に、それも零下十七度という寒い日に、幼稚園から出火したのである。たった一時間で、すべてが焼失した。私は、クリスマス休暇で旅行中だったが、ラジオで、そのニュースを聞いた時は、全く耳を疑った。幸い、子どもは一人も、建物の中にいなかったが、建物と、教育教材は全部なくなってしまったのである。

ところが間もなく、私のところの電話がなりはじめた。町と州のあらゆるところからの問い合わせや見舞いの電話だった。多くの人々が、この幼稚園のことを心配し、復旧するための助力をしようと申し出てくれたのだ。先ず、モルモン宗の教会が、最近改

装したばかりの礼拝堂を貸してくれたし、商工会議所は、教材教具の費用を出すことを決議した。インディアンの建築管理人たちは、ロッカー、戸棚、砂場、水遊び場などをつくり、床にリノリュームを敷いてくれた。焼け跡近くの倉庫から、焼け残りの道具類を取り出してくれた人たちもあったし、床をこすり磨き、ペンキ塗りをしたのは、教師たちであった。そして、ちょうど、三週間で、私たちは、幼稚園を、前よりも、数等気持ちよい、整った設備のもとで再開することができたのである。

現在と将来

新しい経済計画は、いまや、インディアンの幼児教育事業に、新しい方向を示している。ナバホインディアンは、二十四のクラスを開く資金を要請しているし、アパッチ、サンカルロス、パパゴ、シオックス、ユーテスの各インディアン部落が、幼稚園開設の要望を提出している現状である。一般に信じられている通説と反対に、インディアン人口は、年々激増している。一九七五年までには、七五万人に達するであろう。そして、一万人の教師が、インディアンの教育に当たっているのだが、この教師たちは、今後、インディアンのことをよく理解している指導者に、特別の訓練をしてもらう必要があると思われる。

終りに、私は、アメリカ大統領の顧問的存在で、インディアン問題の権威者である学識経験者、ロバート・ラッセル氏の著述から少しばかり引用したいと思う。

「現今、この科学と技術の時代において、我々は、ほんのちょっとではあるが、人類の相互の関係について注意を払うようになってきた。遠いコンゴや、フィジー島で起こったことが、直ちに、我々の現在の生活と、未来に影響をおよぼすということが、現実になってきているからである。大洋は、今や小さな湖、高山も丘にしか過ぎないのである。『一つ世界の我々』という概念は、もう空間的なものでなく、時間であり、我々の思想を支配し、支えるものとなっている。

しかし、この、地球上の親近感にもかかわらず、我々アメリカ人は、最初の原住者であるインディアンを理解することに、失敗してばかりいるようだ。インディアンたちはテレビの画面で大活躍をしているのだが、このこと自体、かえって、真の理解が、どんなに欠除しているかを、示しているのではないだろうか。わが国が、他の国との違いを理解し、尊敬するようになるためには、インディアン教育の仕事を通して学ぶ数々の教訓が、大いに役立つことであろう」

人生に記憶と愛情がなかったならば
それは月と同じように不毛の地であろう――トムリンソン

（平安女学院短期大学・片岡霊恵訳）

乳児期から成人するまで

ジーン・ウォーカー・マクファーレィン

これは、乳児から成人するまでの三十年にわたる成長・発達に関する研究からわかったことの一部についての報告である。この研究の指導者だったカリフォルニア大学（バークレイ）人間発達研究所の心理学の名誉教授並びに研究員であるマクファーレィン女史が、学校の先生にとって、有意義と思われる資料を提供された。「どんな年齢になっても……我々は自分の得た自尊心をさらに増し、自分のもてるものを最高度にひき出してくれるような人を好むものである」女史が研究から見出したことは、教師は単に教科についての知識をもつだけでなく、子どもの個性を十分知り評価でき、そして教えるにあたっては弾力性をもつべきであるということだった。

この論説は、ガイダンス・スタディ（Guidance Study）の名で知られている長期間にわたる成長に関する研究プロジェクトの要約をつくるようにという求めに応じて書かれたものである。ガイダンス・スタディは、一群の乳児を、彼らが十八歳になるまで、その児童期、青年期を通じて継続的に調べ、さらに彼らがおとなの仕事つまり自分の子どもを責任あるおとなへと育てあげるという仕事に直面する年齢である三十歳になった時に再び調べた研究である。我々の研究対象となった人々およびその家族との、この長期にわたる徹底した共同の仕事から明らかになったいくつかの事柄について述べる前に、まずこの研究の目的と性質をざっと紹介しておこう。

研究の目的

研究対象者は、ごく普通の人間のサンプルを得たかったので出生届の登録簿によって抽出された。この点で、他の多くのこの種の研究が問題行動を扱っているのと対照的である。研究の全体目標は、(1)正常な人間の身体、知的過程、人格の成長発達の事実を記述し、種々の発達の時期での個人内および個人間の成長発達の

変動を確証すること、(2)これらの見出された事実と、(イ)生物学的事実(体格、性、健康、成熟の度合)との関係、(ロ)物理的、知的、社会的環境条件——家族、遊び友だち、学校友だち、先生、その他当人にとって重要な人々との人間関係を、それらの人々のパーソナリティーやそれらの人々が与える影響を含めて——との関係を調べること、(3)ある人々は自分の可能性を十分に実現しているのに対し、ある人々はそうできないでいる。またある人々は成熟し揺ぎないパーソナリティーを発達させているのに、他の人々はかたくなで神経症的に未熟で非効果的な行動パターンにしがみついている。さらにまたある人々はストレス下で新たな力を得るが、他の人々は闘いをあきらめ支離滅裂になる。こういった差異をもたらすのに決定的に関与するのはどんな事実の組み合わせなのかを明らかにすること、(4)我々が研究で用いたパーソナリティーや知的能力の評価の道具が、短期的および長期的にみてどの程度発達予測ができると信頼してよいかをみることである。

研究の手続

このように短い論説では用いた方法の詳細を述べることはできないが、上述のことからもわかるように、生物学的側面、環境的側面、行動的側面、家族関係と広範にわたる測定を繰り返し組織的に行なわねばならなかった。レントゲン、身体計測、知能テスト、プロジェクティブ・テストの他、親、きょうだい、子ども自身、臨床心理家や医師など専門的面接者などとの面接記録がとられた。学級内でのソシオメトリー、毎年の学業成績も採られた。

見出されたこと

我々の研究でわかったことの中から、あまり専門的にわたらずに、幼稚園から中学校までの子どもを扱う先生に関係あると思われるものを拾い出してみよう。まず、我々の用いたいくつかの発達領域での評価の道具がどのくらい将来の予測力をもつのかをみてみよう。予測の程度は、長期にわたって、身長などの身体計測的なものが最もよく、次いで知能テスト、最もわるいのはパーソナリティー・テストとなっている。集団のメンバーが、各年齢を通じてその集団内で、どの程度同一の位置を保つかを示す指標となる年齢間の相関係数は、身長では三歳と十八歳との間では〇・七、知能テストでは約〇・四となっている。パーソナリティー測度については、三年間隔の年齢間相関でも〇・四に達するものは僅かであった。また、知能テストの成績は、年齢が増すに従って年齢間の相関が大になる(この結果は、ベイリイとソンタグの研究結果でも明らかになっている)、すなわち、年齢が増すにつれて知能テストの成績は安定してくる。三年間隔での相関をみると、三歳と六歳の三年間隔では〇・五五、四歳と七歳では〇・五九、五歳と八歳、……、八歳と十一歳の各三年間隔では順次〇・七〇、〇・七六、〇・七九、〇・八五、そして九歳と十二歳では身

長での三歳と六歳の相関と等しくなっている。これは、身長の測度（センチメートル）が知能指数という測度やパーソナリティーの測度よりすっきりとしたものであることによるというだけでなく、身長の発達が、知能やパーソナリティー発達よりも早い時期に起こるということによる。我々の研究対象者についてみると、身長が、各人の成熟時の高さの半分に達するのは女子では平均生後二十か月、男子では二十六か月である。これに対して知的能力やいわゆるパーソナリティー特徴といわれる永続的な適応パターン――ただし素質的に規定される気質を除いて――は、この年齢ではまだ成人のもつものの何分の一というごくわずかしか開花していない。

知能テスト成績の変動は、個人内の知能指数の変化をみた方がその意味がよりはっきりするだろう。六歳から十八歳までの間に行なわれた八回の知能テストでは十五パーセントのものがＩＱ十以内の変動を、五十八パーセント――約五分の三――がＩＱ十五以上の変動を、三分の一がＩＱ二十以上、十分の一がＩＱ三十以上、二十分の一がＩＱ五十以上の変動を示している。このことからわかるように、この八回のテストでの一年平均の変動は四分の三のものについてはＩＱ十以下ではあるが、一回のテストには、ことにそれが幼少の頃に行なわれた場合には、それほどの信頼をおけないのである。

生育史とテストを受けた時の生活環境とを詳しく調べてみると、知能指数は、次のようなものと関係があることがわかった。すなわち、生得的な能力、子どもの家庭のもつ知的な興味と刺激、言語的環境、知能テストでおさめられる成績に対する態度、テスターに対する態度、自分の知的能力についての自信の程度、ストレスの下でかえって機能が昂揚するかそれとも消沈してしまうかの習性、対人関係が円滑にいっているか否かということ、テスト自体および他の一般生活の中で著しい情緒問題があるか否かということ、テストの性質等々の複合したものに関係することが明らかになったのである。集団としてみれば、知能テスト成績と教育的達成度（訳注、学歴）の間に決定的な正の相関がある。**しかし、この研究でわかったおどろくべきことのひとつは、知能テストと学業成績とが悪かった人――何人かは高等学校までそうだったが――で、現在は、創造的な知的能力を必要とする仕事についているものがかなりあるということである。**このような例は、以下の予測の正しくなかった例という項で紹介されるであろう。

人はどんなふうに成熟するか

この長期の研究を通じて我々は、人が成熟し、自分自身を受け入れ安定した状態でいられ、自分の潜在能力を十分発揮できるようになる唯一の道は、全生涯にわたって次第に成熟していく経験を通してであるという結論に到達せざるを得なかった。もちろん

問題をどのようなしかたで解決するか、どのように学習するか、どのようなしかたで困難に対処するかということは、それぞれの個人の年齢、潜在能力、体格、気質、健康などの要因により変わってくる。身体的側面についていえば、それらは、たとえば、乳幼児期、青年期などの成長速度の速い時期にいるかどうかということで変わってくる。同様に学習内容も、その環境の中にいる人人すなわち両親、先生、きょうだい、学校友だちなどが許容的であるか、奨励的であるか、要求的であるか、賞めるか、罰するかなどによって異なる。もちろん、訓練、教育をする人の影響は、その人の生来の性質と相まって訓練、教育の方法によって変わってくる。子どもの能力に過重な圧力や子どもの性質に反するような訓練、教育方法がもたらす結果は、子どもによってさまざまなものとなる。ある子どもは、一層奮起努力しようとするが、ある子どもは不安になり打ち砕け、事態に対し誤った対応の仕方をし、またある子どもは防衛的になって何もできずにおり、またある子どもは非行に走り、更にまたある子どもは、不適切で不健康ないろいろな試みをしてみるというふうである。

正しかった予測と正しくなかった予測

個々人が遭遇する学習すべき課題は多様であり、異なった個体にいろいろ異なった発達の時期に首尾一貫性を欠いた圧力が加わっているのに、なぜ、多くの人が首尾一貫性をもった成人になるのか、我々にはまだ確かなところはわからない。我々は、成長しつつある時代に子ども自身や、両親や教師がぶつかっていた不安やジレンマを非常によく知っていたので、ほぼ十二年後に成人した彼らをみた時には、劇的ともいえるおどろきに打たれたのであった。約半数のものは、いくつかの異なった理論的立場のどれから予測されたよりももっと安定し、有効に生活している成人となっていた。約二割は予測されたより悪く、予測どおりのものは、三分の一以下であった。

我々の予測が正しかったのは、幼少期にいろいろな面で過度に統制的なしつけをうけ、束縛の中にとじこめられたような人々についてである。これらの人々はその防衛パターンが非常に堅固になっており、それが一面では彼らを保護してはきたが反面多くの学習の機会を閉ざし、経験も乏しくなり、貝殻にとじこもったような状態になっている人々である。彼らは、多くの場合、貝殻のようにとざされた性格を一層強めるような同じ性格の配偶者を選んでいた。予測が正しかったもう一つの場合は、精神発達遅滞児である。第三の場合は、家族の子どもに対する取扱いが一貫性を欠く——ある時は溺愛的であり、ある時は厳しく子どもの自信を失わせるような取扱いをするものであった。これらの人々は、安定し統合された行動パターンを習得するのに三十歳までかかった。強迫的に酒を飲まずにはいられない人々の大半は、このグル

ープに属する人々である。

次に予測が誤っていたもの（約二割）についてみてみよう。彼らは、十八歳までの記録では、運動や芸術その他の才能の面で、あるいは家族関係、社会関係がうまくいっていることからみて、有望な将来を約束しているように思われたが、成人してからの評価では、潜在能力を十分に発揮できていないとか、不満で緊張した生活をしているとかのために、予測されたよりも遙かに浅薄な人格しか持つに至らなかったものである。これらの例の大部分は、青少年期に、非常に成功していた運動選手だったものや、美貌で社会的生活できわだって成功していた少女だったものである。これらの人々は、成人してからはもはや青少年期に仲間や先生や両親から与えられていた名声が得られなくなってしまった。彼らはもはや自分が成功していると思うことはできなくなったのである。彼らは地味に努力する前にあまりに若くして異常な成功を経験してしまった。そして、彼らのエネルギーの不当に多くの部分が自分自身のイメージを保持するために使われた。しかし成人してからの人生はそれほど甘いものではなかった。青少年時代までのある年代での成功は、成人してからの成功をはかる測度とはならないのだ。自分の力で獲得したのではない過去の成功は重荷ともなり得る。しかし彼らに時間を与えよう。彼らはもともと才能を持っているのだから、この中から何人かの人は現在の不満状態から脱け出すであろう。しかしなお何人かは過去の成功のことを思い、どうしてそれが去っていったのかをいぶかり、良き若き日々にあこがれながら人生を送るのではないかと懸念される。

予測よりよくなった例

人格形成にとって、一貫して不利な条件をたくさん背負っているという事実に基づいて、偏った不完全なおとなになるだろうと予想したが、どの予測よりもよくなった例――ことに一割ほどのものは予測よりはるかによく成熟し有効に活動する人間、あるいは非常に創造的な人間になっていた――についてみよう。これらの人々の数はたいへん多い（全体の約半分）。これらの人々は、過去と比べて自分の現在に驚きの念をもっていて、その生活のあらましを喜んで我々に話してくれた。

幼児期、青・少年期の行動パターンに影響する種々の要因について論ずることはさておき、とにかくこの人生の初期の状態と成人してからの状態を描写してみよう。これら一割の人々の中で二人は、長い間「きまり」に対する反抗にそのエネルギーの大部分を費やしてきた。知能指数は高かったが、学業成績は及落の境目だった。学校での時間のうちの多くの部分を「校長室で過ごす」ありさまだったが、やがて公立学校をひとり（女子）は十六歳のとき、いまひとり（男子）は十五歳のとき退校させられた。現在はふたりとも人生の複雑さをみとめ受け入れ、人間に対する同情とユ

ーモアを持ち、賢明で安定した理解ある親になっている。女性の方は、専門的訓練を受けた後、自分の子どもが学校に行っている時間を利用して、かなりの時間と力を身体障害児のためにつくしている。男性の方は、自分で事業をし、家族のために十分な収入を得、また家庭では父親と母親の二役（子どもの母親がいないので）をつとめている。ふたりとも自分たちの人生をふりかえって、自分たちがしたような、こんなに困難な、エネルギーの浪費のようなやり方よりももっと容易な成長の道筋があるに違いない、といっていた。

いまひとりの例は、三十歳になってから我々の予測を裏切るように変わったもので、彼自身も高等学校卒業までの自分を「怠けもののみそっかす」だったといっていた。彼の知能指数は、十八歳までは百近辺だった。小学校で三度も落第し、高等学校を卒業したのは二十一歳のときで、大学進学の推せんはもらえなかった。彼は自分の育った土地を離れて、高等学校での不足の埋め合わせをし、現在では非常に有能な建築家となり、「自分の子どもを通して正常な子どもの時期を生活している」ということだった。彼は、自分の地域社会での活動家であり、「人生は興奮を覚えさせる素晴らしいものであり、満足だ」といっている。明らかにこの例では、十八歳までの知能テストで測られた知能指数は、学業成績とは一致したが、彼の真の能力の測度ではなかったのだ。

いま一例、成績は及落の境目で、社会的には孤立しており自己中心的で不幸な少年だったのが、現在大きな建設会社の支配人になっている例があげられる。彼の仕事上での主要な満足は、部下に徐々に責任をかけ、より難しい仕事を与えていって、彼らが自信と能力を増していくのをみることであった。

さらにいまひとつ、身体の大きい臆病な早熟の少女だった人の例をあげよう。彼女は、肥満型であり、母親にとって自分は失望であったに違いないという恥の気持ちに悩み、母親から認めてもらいたいためにB平均の成績をとろうとただひたすら勉強する。平凡でおもしろみのない少女だった。生きる価値を見失って抑うつ状態に陥ったこともあった。その後大学三年の時、自分の学んでいることに非常に興味を覚えるようになり（母親を喜ばすべく単によい成績をとるということにだけではなく）、さらに大学院に進み、大学で教えるようになった。そして今では子どもを持ち自分で育てている。彼女は陽気で知的なおもしろみのある男性――彼に大学院時代に出会った――と結婚した彼女は理解と温かみのある、生きることに情熱をもった人間になっている。「人生は、今では、非常に良いものだと思っています。――けれども気持ちのよい幸福な人生に到達するまでには長い、長い、時間がかかりました」ということだった。

誤った予測をひき起こした原因

我々の予測はなぜ間違ったのだろうか。個々の生育史を見直し

てみると、誤った予測に導いたと思われるいくつかの要因を認めることができる。

(1)まず我々は、問題行動や、病因的側面に重きを置き過ぎて、成熟によってできてくる要因を軽視しすぎた。大部分の人格理論が病理学的立場から出ているのでこういった側面に過敏になり、人間はおのずから安定化し成熟していくことを見過ごしていた。このことについては資料はあったのだが、これらの要因を重視せず目前に横たわっていた問題行動にのみ気をとられ過ぎていた。

(2)我々は、子ども時代に習得され習慣化されたよい行動様式や態度が、永続的であることを過大評価しすぎた。これらの行動様式は、それがどんなに習慣的になっていようとも、状況が変化して、新しい事態では目標に達するのにもはや有効な対処の手段方法ではないということになれば、大部分の場合、放棄されるか修正されるかするようだ。このような再学習を試みている期間は、だれでも不安であり、やってみたり、やめてみたり、突拍子もないことをしてみたりという行動があらわれた。この、既にもっているパターンが新しい欲求事態に対して不適切であり、しかし他方新しいパターンが定着しない時期は、青年自身にもその親にもはっきりとみとめられた。

(3)我々が学んだいまひとつのことは、成熟に伴う苦悩と混乱をくぐり抜けることなしに成熟する人はひとりとしていないということである。我々は、ひどく外傷経験と思われ、従って成熟をもたらさないというような経験でさえもそれが成熟につながることを観察した。成人した我々の研究対象者はこのような経験の故に彼らが欲することと欲しないこととの間に調和を見出すことを発見したのである。これらの経験は、やがて明確な方向に向かって行動の方向を変えることに役立ち、これにより成熟をもたらす経験となった。

(4)さらにいまひとつわかったことは、我々の研究対象となった人々の多くは、結婚するまではエリクソンのいう「自己同一性」を得ることができなかったということである。彼らは結婚して親となってはじめて、他人への責任を通じて自分に価値があることを認めることができる役割を与えられる。(むりやりに与えられる場合もあるが)――このようなことは青少年時代の専ら受けるだけの人間関係ではなかったものだった――

(5)我々は、長い間続いたパターンが修正され変更されるといっても、それが全く正反対の性質のものに変わるとは考えていない。例えば、我々の研究対象者で過度に依存的な人の非常に多くが、養護的な愛情深いパターンに変わった。しかし、極度な過保護になったのではなかった。これは、それらの人々が、自分の子どもの中に育みたいのは自信であり過依存性ではないことを知っていたからである。エネルギッシュで支配的な母親をもち、長い間過依存だった男の子の場合、我々の予測は、ちょうど母親のようなタイプの女性と結婚し、過依存のパターンを続けていくだろ

うということであった。ひとりふたりについてはこの予測は正しかったが、大部分の過依存の男の子だったものは、彼ら自身が支えとなり保護者となる誇り高き男性の役割を与えられるべく、自信を欠いた女性と結婚した。彼らは、このような自分を中心とするのではない位置に自分を変化させるという新しい状況の下で成功したのだった。警察官となった四人のうち三人までが、年上のできのよいきょうだいをもち、さらにそのうちのひとりは支配的な親をもっていて晩熟であったこと、また多数の社会的不適応の子どもだったものが、あたかも補償的に社交技術の要るセールスマンとなったということも単なる偶然とは思えない。

(6)ある人々は「遅咲き」あるいは「固まりの遅いゼリー」のようである。これらの人々は長い時間かかって、また育った土地や家族から離れて、新しい環境で青、少年期の混乱と禁止から抜け出し、自分自身となるように自己解放をなしとげた。ある人々は人生初期には葛藤する欲求と思われたものを包みこんでしまうような仕事を得るか、あるいは遂に自分を打ちこめる有意義な仕事を得てはじめて自己を確立できたのだった。

個々の子どもの最もよいものをひき出すこと

あなた方は教師として直接子どもに影響を与えるのは、子どもの長い成長発達の期間から見ればほんの一部にすぎない百八十日の間だけである。しかし、我々の研究対象となった人々が三十歳になったとき、そのすべてが先生を覚えており、また非常に多くの人は、先生のことを彼らの気持ちを尊重し、興味をかきたて、彼らのもてるものを最高に発揮できるようにしてくれた重要な人として覚えているのは驚くべきことである。もちろんどんな年齢になっても人は自分の自尊心を増大してくれる人、自分のもてる最高のものを引き出してくれる人を好むものである。最近の流れとして、「もっとむずかしいことを教えよ」という、知育重視の耳ざわりな要求がきかれる。ここでは学習者である子どもは、興味、性格、内的モチベーションが個人個人みな異なっているのだという事実を余りにも簡単に無視している。教師に要求されることは、教科の知識だけでなく、子どもの個性を知り、それに価値を認め、それぞれの子どもが興味をもち、一生けんめい勉強するように仕向けるような柔軟性のある教え方ができることである。ここで私が、子どもを教えることに喜びをもつ先生方に促したいことは、「警鐘を打ちまわすロやかましい見物人（訳註、直接に教育にたずさわらず単に論評を加えたり、机上論から生まれた方針を論ずる人）」に押し流されないようにして欲しいということである。もちろん、もしあなたが、この幼童期と呼ばれる個人個人の非常に豊富な多様性を認め、それに興味をもつに至れないならば、教師を職業とすることをやめるべきである。なぜなら、この豊かな多様性に教師は必ず出会うのだから。

（青山学院短期大学・伊部泰子訳）

—メ モ—

幼稚園教師のために

ムリエル・クロスビー
デラウェア、ウィルミントン小学校

幼稚園の教師は、幼稚園が小学校の教育計画の中で果たす役割の重要性について確信をもつ必要がある。

幼稚園の教師は、

・幼児のほんとうの要求に気づく必要がある。

・五歳児にとって意味のある経験を与える技術をもたねばならない。

・幼稚園の日日の教育を適切にすることに熱心でなければならない。そして、いわゆる六歳児の教育目的を五歳児に押しつけるようなことをしてはならない。

・六歳になればみんなが直面しなければならない教科の枠の中に、五歳児をいれようとする現代の社会の圧力に対して、まじめな抵抗をすることができるものでなければならない。

幼稚園は「よみかきのための幼稚園」であってはならない。幼稚園のときに、よみかきの手引きを受けた子どもたちの方が、一、二年生の適当な時期によみかきをはじめた子どもたちよりも、三年生または六年生のときに、よみかきがすぐれていることを示すような研究資料はないのである。むしろそれとは逆の資料の方が多い。

一年生のときによむことを要求された子どもたちも、二年生になるまで形式的なよみかき教育をはじめなかった子どもたちも、三年生の終りに同等のよみかき能力であることを示す研究もある。

ライトストーンは、このことを一九三〇年代のはじめに見出し、オルセンの最近の研究はこのことを支持している。

（子供の教育、一九六〇年十月号より）

幼児の教育　第六十六巻　第八号
八月号　©　定価八〇円
昭和四十二年七月二十五日　印刷
昭和四十二年八月　一　日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

幼児のための紙芝居です

●'67年度幼児テキスト紙芝居全集第5回配本中

たのしい生活シリーズ

たろうのバケツ

¥420　画・坂本　玄

ゆたかな心シリーズ

ポケットくらべ

¥420　画・和田　誠

名作12集

二ひきの子ぐま

¥420　画・加東てい象

東京都渋谷区千駄ヶ谷5－17　TEL(341)3400・3227・1458　振替東京 29855　株式会社 教育画劇

■創業60年記念■

フレーベル館

現代幼児教育研究会

ことしの全国大会は蔵王です！

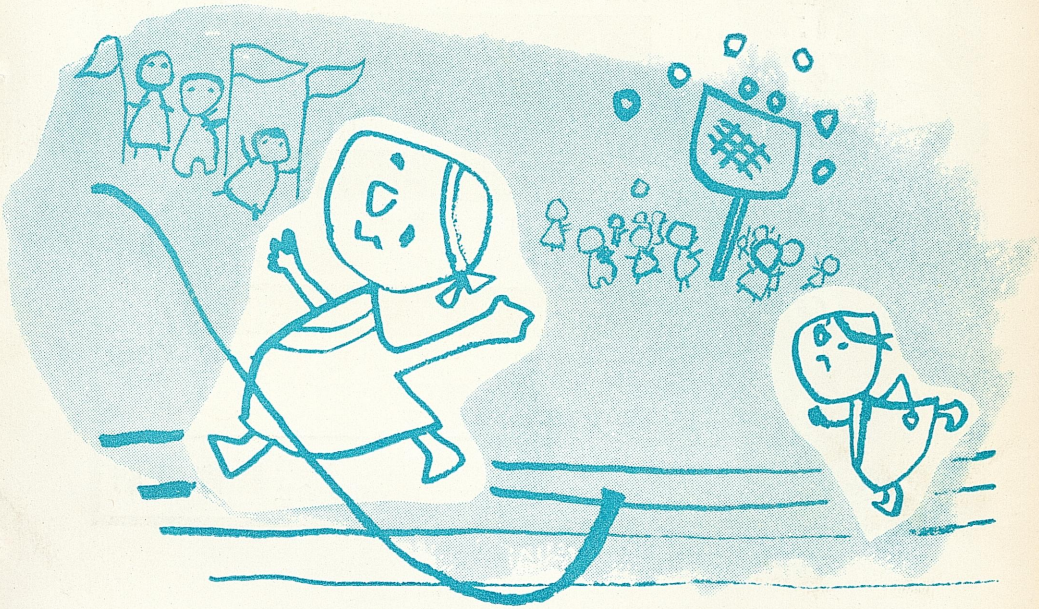
期　日　8月8日(火)・9日(水)・10日(木)
会　場　山形市　山形県民会館
宿泊地　蔵王温泉
全体講座　三木安正先生
分科会　①三木安正 ②平井信義・秋田美子 ③藤田復生 ④小林純一 ⑤磯部　俶 ⑥藤田妙子 ⑦山村きよ ⑧山内昭道の各先生による8分科会
ゲスト　ボニージャックス・フレーベル少年合唱団のほか記念講演特別講師
交　歓　キャンプファイアー・ミーティング・レクリエーションなど

会　費　700円　(資料代ほか)
宿泊費　Ⓐ3,900円　Ⓑ3,500円　(2泊4食)
昼食費　390円　(3食)
観光費　650円　(山形→蔵王山頂→仙台)
(合計)　Ⓐ5,640円　Ⓑ5,240円

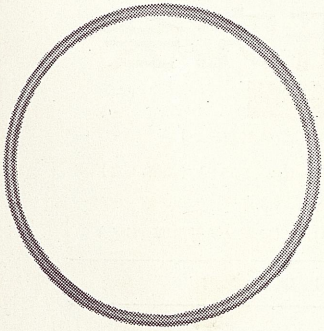
定　員　1,600名
締　切　7月15日(土)
申込書　もよりのフレーベル館代理店・出張所で所定の申込書をお受けとりください。満員になり次第締め切りますので、お早めにお申し込みください。

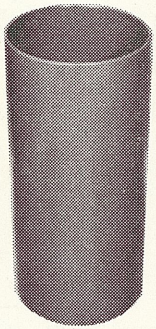
主　催　株式会社 フレーベル館

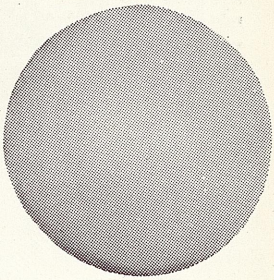
運動会のシーズンがやってきます



キンダーカラーフープ　**キンダー六色円塔**　**キンダーパスボール**







幼児期における運動は、子どもの成長に大きな関係があります。運動会などで、子どもたちをのびのびと遊ばせるということは、そういう意味でも大へん重要なことです。フレーベル館では、輪とか、ボールとか、円塔のような素朴な運動具に、６つの色を統一してつけました。色が統一されているので、それぞれの遊具を併用して使えば、多くの遊びに活用することができ、子どもたちの運動会は一層楽しいものになるでしょう。

●**キンダーカラーフープ**・大（直径60cm）１組1,500円・中（直径40cm）１組1,200円・小（直径20cm）800円●**キンダーパスボール** 直径19.5 cm・１組2,500円●**キンダー六色円塔**・大塔（高さ30cm・直径16.5cm）・中塔（高さ30cm・直径14cm）１組3,500円●**色の種類**（黄・赤・青・桃・緑・白）

発売・株式会社 フレーベル館